

No. 18 October 1994

# Womanpower



フェミニズム・宗教・平和の会

# もくじ

宗教意識アンケート調査	2
(1) アンケートの結果を見て	23
(2) アンケートの結果を見て	25
(3) コメントーあるいは単なる感想	26
(4) アンケートを見て	28
(5) アンケートの結果を見て	28
(6) アンケートを見て	38
女と国家ー観念による呪縛ーA 『古事記』 (十五)	41
「現代版榎山節考ーわが家の事情」	42
書評と紹介ーTransforming Grace	47
天理教の実体には失望	49
フェミニズムという名の不幸と宗教心理	51
編集後記	56

表紙台字 松尾紀子／シンボルマークは「靈」を表す象形文字です。

## 宗教意識アンケート調査

中山 庸子

今回の宗教意識アンケート調査は、「フェミニズム・宗教・平和の会」のメンバーであり、眼にみえない世界に意識を向けることのできる会員のみなさまが、自分自身とそうした世界とのつながりを、そしてこの時代に生きる他者をどのように認識されているのか、ということ明らかにすること、さらに具体的には個々の宗教性が日常生活のなかでどのような姿をとっているかをとらえる、ということを目的に調査いたしました。

ご協力ありがとうございました。以下その結果をまとめます。

調査対象は「フェミニズム・宗教・平和の会」会員（海外在住者二人を除く）九三人でした。受取人なしとして返送されてきたのが三通あり、五人からの回答が寄せられました。回答率五六、七%です。年齢層別に見ると、二〇代三人、三〇代九人、四〇代一六人、

五〇代一三人、六〇代以上一〇人でした。男女別にみると女性が四四人、男性が五人、不明が二人でした。

全体像を把握しやすくするために、その回答内容の傾向から回答者五一人を五つのグループに分けました。このグループ分けは設問一と二の回答に基づいたものですが、厳密な理由があるわけではなく便宜的なものです。

イ) キリスト教系、

ロ) 仏教系、

ハ) ユダヤ教などそれ以外と、イ、ロ、と明言できないグループ

ニ) 信じているかどうか「なんとも言えない」グループ

ホ) はつきりと「信じていない」と答えた人のグループ

人数は イ) 一七人、

ロ) 一人、

ハ) 一〇人、

ニ) 一〇人、

ホ) 三人、です。

このあとの統計にはこのグループごとに意味のある差があればグループごとに述べ、意味がないようであれば、グループに分けずに全体として述べることにし

ます。「意味がある」とはいえ、全体数が少ないので、いわゆる統計学上の「有意差」とは異なります。回答数が五〇なので、パーセントで考えたいときはその実数に2を掛けるとほぼパーセント値になります。ここで用いる名前がわりのアルファベットにはまったく意味がありません。

宗教に「関心がある」人、あるいは研究者であつて信仰生活をもたない人などを考慮にいたれた設問を当然用意すべきでした。このような方々には答えにくい設問で、この点お詫びもうしあげます。

「用語の定義が必要である」という指摘が二、三ありました。調査によつてはそうしないと何を計つていいのかわからない、ということになります。しかし、本調査はこの設問表現を主観的に理解した範囲内で答える、というスタイルではないかと思ひます。「神とは」「仏とは」というところから定義を始めると、それでは自分は回答できない、ということもできずから。

問一、神仏、あるいは「神的なもの」、「超越的なもの」を信じていますか。

「信じている」人は三三人で、会員の六、七割にあたる。そして「信じていない」人は三人、そして「な

んとも言えない」という人が一四人。

また「道元の思想に共感している」あるいは「聖書、歎異抄、老子、荘子他人間の古典として読む」という表現で、思想として耳をかたむけていて、自身の信仰とは考えていない例が二つあつた。しかしこの二人のうち古典として読むKさんは、「眼が開ける思いがするとき、雨がやんだりする、天候と心の動きが同一であるときが時にある」という表現で、自身の「神の臨在」体験を語り、超越的なものを「信じている」と表現するひとりである。自己と「神的存在」とのつながりを個人的に体験する人が増えているというが、彼女もそのうちにひとりのようである。

「なんとも言えない」人のなかで「超越にむかう人の心のありようにひかれる」と表現するのはNさん。

問二、どんなかたちで信じていますか。

もつとも多いのがキリスト教で一八人。そして仏教一四人。神道三人。ユダヤ教一人。ニューエイジ二人。「個人的な思いであつて、信仰とはいえない」という人もいる。なかにはキリスト教と仏教、神道、祖先崇拜、「おみくじを引く」、「あの世の存在を信じている」の六つに丸をつけた人、あるいはこの項目でキリスト教と仏教を選び、しかも問一で「信じていない」

という例があった。このような研究者的立場と思われ  
る例が少なくない。しかしやはり信仰をもつ研究者が  
多数派である。

「キリスト教」ではなく「イエス」そのものに焦点を  
あてて「イエスの根源志向」であるとするとTさん。そ  
してTさんは「毎日祈る」人でありながら、問一には  
「なんとも言えない」の選択肢を選んだ慎重派だ。

「あの世の存在を信じている」を選んだ人が問一  
「信じない」グループ、ホ）以外のどのグループにも  
いて六人、そして祖先崇拜に○をつけた人が四人。

問三、（広い意味で）「神的な存在」、を意識してか  
ら何年になりますか。

古典として聖書などを読むというKさん・・・「小  
学二年から（中学二年まで）キリスト教の日曜学校に  
通った。規範へのあこがれがあった。」

問四、「神的な存在」を確信してから何年になります  
か。

「一〇年以上」が三人。全体の二〇%にあたる一  
〇人が「確信しているとは言えない」と答えている。  
「一から五年」が二人。「五から一〇年」が三人。

特定の宗派の用語にならないように、「神的な存在」

という表現を用いたが、「（仏教の概念世界では）ど  
ういうものに置き変わるのか苦慮した」というもつ  
もの声があつた。

―出家尼、禅宗のEさん・・・「確信しているとは言  
えない」「禅宗のなかにもキリスト教的“神”と禅で  
いう“無”というものと同視する方々もいらつしや  
る」しかし、今の自分はそのようには考えない。そし  
て「未来永劫、研さん、弁道していくことのなかに安  
心（あんじん）がある」として、自分自身は「救世主  
的な神仏、超越的なものについてさほど関心はない」  
「“見性”という一種の“悟り”体験をしたからとい  
つて、それが特別重要とは思わない」

―ユダヤ教の信徒Mさん・・・「小さいときから神を  
信頼することが当たり前という意識をもっている」。  
「信じる」あるいは「確信する」のではなく、「神を  
信頼することを前提にして生きる、そういう生き方を  
任意に選んでいる」

―キリスト教のHさん・・・「確信しているとはいえ  
ない」「神あり、と賭けた二〇〇五〇代であるが、確  
信がゆらぐことがある」

問五、日常生活のなかであなたの信仰（広い意味で）はどういう意味をもっていますか。

選ばれた頻度の高い順番に並べると、「（信念に基づく行動への）力を得る」と「安らぎ」がもっとも多く、その次「励まし」、「規範」、「反省」、「慰め」がほぼ同数で続く。

キリスト系グループのなかにはその他の項目に「いのち」と書いた人が二人。「それがなくては一瞬たりとも生きながら得ることのできないもの」という意味で。あるいは「自己の生存の承認」、「目標」、「行動のほとんどすべてに価値（＋も－も）を与えるもの」としている。キリスト系のなかでもっとも多かったのが「力を得る」であった。

仏教系でもっとも多く選ばれたのが「安らぎ」である。「規範」を選んだのは（キリスト系よりも）この仏教系で少し多い傾向があった。

問六、確信を深めてくれた体験はどんなものですか。

もっとも多かったのが「自身の体験」で六割（三二人）。その半数にあたる一五人が「書物」そして「人の話」を選んだ人が八人で、その半数がキリスト系。

キリスト系においては、自身の体験の具体例として

「失恋」。「その他」のなかには「精霊体験」、「祈りのあと、くすしいみわさを示されたこと」、「つらい体験」、「育つた環境。家庭とミッションの学校教育」、「人の生きざま」があった。

仏教系においては、自身の体験の具体例として、「無常の世の中で自分の欲を追い求めるだけ」で「一生を過ごしてしまう生き方に疑問をもった」Eさん。禅宗のなかで「感応道交による」と表現したJさん。非常に強烈な確信体験にめぐまれたのはOさんである（これまであまり人にはなしたことのない大切な経験をここに示し、シェアしてくださるOさんに感謝します。）

I Oさん・「宇宙的な生命の根源である存在との出会い。人間の感得できるあり方では光（真宗でいえば光は命であり、知恵、真理）である。人間を含めすべての有情はこの根源の光を分け持つて存在している。人間は目的をもって生まれてくるのであり、使命を達成すれば、またこの光の国に還ることを教えられた。この体験によって親鸞の教えに導かれ、さらに仏教やその他普遍宗教の根本にあるものは共通ではないかと思うようになった」

Kさん・「深い体験をしたときよく歎異抄、聖書の

言葉が思い出される」

知識が知恵になると、こうした姿をとるのではないか。

基本的には「信じていない」が、「自然美に接したとき」信じたくなる、という人もいる。

問七、聖書・教典はだいたいそのまま正しいと信じていますか。

- 一、「そう思う」七人（キリスト教系四、仏教系二）
- 二、「かかれた時代を反映していて問題があると思う」三二人（キリスト教系一〇、仏教系七）
- 三、「時代に合わせて書きかえるべきだ」一〇人、（キリスト教系〇、仏教系五）

問題あり、とみる意見が多数派である。

キリスト教系グループでは補足コメントが多い。

「そう思う。しかしその時代の背景を考慮しながら、そのcontextの上に読みとることが必要だと思う」「そう思う。ただし、何を読みとるかについては新たなものがありうると思う」「そう思う、しかし、聖書は、サイエンス、を語ろうとしているのでは全くないと思う。また、いわゆる外典・偽典には教典の位置づけを与えるべきではない、とするプロテスタントの一般的考え方に同意する」「これらのどの選択肢でもなく、四を加えて記述した例も目立つ。たとえば、「（聖書は）

読み手が意味を引き出すもの」「聖書は神と共に生きた人々・神と共に生きようとした人々の信仰証言集」「福音書は一で、その他は二」「正しいことにしなれば教典足り得ない、という姿勢をとる」

仏教系グループをみると、一よりも二と三が多い。なかには一、二、三ともに該当印をつけ、二「なかには（問題のあるものもあると思う）」、三「一部書き替えてやさしくしてもよいと思う。ただし真理は一つ」と補足説明を加えた例があった。

ユダヤ教のMさんは二。「時代に合わせて解釈文をつけ加えるべきだ」とする。

自然崇拜、祖先崇拜の態度をとっているSさんは、二と三で、「蓮如御文章のなかの女性に関する箇所を現代の浄土真宗は問い直してほしい」。

聖書・教典はかかれた時代を反映していて問題がある、という指摘は海外でもでていて、たとえば、ノルウェーではすでに別に印刷した「前書き」を聖書に加えている。スウェーデンでも、この五月、フェミニズムの視点をもった教会関係者や作家、芸術家、政治家が集まって「聖書には女性たちによる前書きが必要か」というテーマで話し合った結果、「必要」という結論をだした。そして別印刷ではなく、聖書のなかにこれを入れるべき、との意見が強かったという。（JAMN）

問八、宗派レベルにしる、信仰を変更した経験がありますか。

はつきり「ない」と答えた人は三人で、六割である。「ある」のは一〇人で二割。一回六人、数回三人、「何度も」一人(仏教系)。

キリスト教系では「ない」人が(一七人中)一四人で、仏教系では(一一人中)六人ということで、わずかなサンプルなので明言はできないが傾向として、仏教系での割合が高いということは指摘できよう。

問九、変更の理由は？

「教義に疑問をもった」七人。「(仲間の)人に疑問をもった」二人。「その他」三人。

「教義に疑問をもった」ことを理由にあげたのは三つめのグループ「その他グループ」で、四人、ということには意味がありそうである。個表にあたって調べてみると、この人達は問一にそろって「信じている」と答えている。そして「教義」として学んだことのあるある宗教をもった経験があり、現在は名のついた信仰つまりキリスト教や仏教などを信仰しているとはいえない。しかも「神的存在」を信じている。その信じ

る内容に違いはあっても、共通しているのは教会、教団、宗派などが介在しないで、「神的存在」と直接的個人的なつながりをもっている人たち、といえよう。どの程度の変更、を変更と呼ぶか、というのも実はかんたんでない問題であるが、主観的に「変えた、前と違うんだぞ」と思っていたら、変えたことになる。その意味で、「変更するほどガチガチではなかった」と断りながら「ある。一回」と「ない」の両方に答えた例にも納得できる。

問一〇、どういう機会に祈りますか。

「毎日」、「日曜日とか決まった日に」、「なにかできごとがあったとき」、「困ったとき」のうちもつとも多いのが「毎日」の一九人で、次が「なにかできごとがあったとき」。

「毎日」のうちキリスト教系は八人、仏教系は七人、その他は四人。「日曜日とか決まった日に」はキリスト教系だけの二人であった。「なにかできごとがあったとき」を選んだのは一六人。「困ったとき」を選んだのは五人。なかには「毎日」プラス「なにかできごと」のあったとき」と答えた人も少なくない。キリスト教系のなかには「常に」とら番を加えた人がいる。また別のキリスト教系の人で、「祈るといふほどあらた

まった気持ちで祈ることはほとんどない。音声言語を  
発せず独り言を思うようなもの」「日々神に心を向  
けている」その状態のことを祈りともいえる、との回  
答があった。「古典」のKさんもこうした祈りのあり  
かたを肯定して、次のように表現している。「“祈る  
”とは私にとっては感覚。“ああ、これだ”と感じる  
ことであって、行為ではない。じつと味わいポーツと  
していること」

問一、その祈りの内容は？

「感謝」と「願い」が多く、ともに二三人、そのあ  
との「決意」、「話しかけ」、「問いかけ」、「祈り  
というより“神的存在”を“思う”」はいづれも一二  
から一四人。

内容にかかわらず、ブツダ（？）よりもイエス・キ  
リストのほうが気楽に声をかけやすいようである。キ  
リスト教系グループのなかで、「感謝」と「願い」の  
ふたつを挙げた人が多い。これらのすべて、と答えた  
人は全体で五人いた。

問二、その時間は一回何分ぐらいですか？

「数分」が二三人、「数秒」が八人、「数時間」が  
二人であった。

キリスト教系では一〇人が「数分」。内容によるの  
で時間はまちまち、との回答が六人。そのようなコメ  
ントを書いたのはキリスト教系だけで、仏教系ではな  
んのコメントもなかった。「祈り」は仏教系の用語で  
はないため受け身の態度で書かれたものらしい。

問三、神の臨在を感じたことがありますか。

「ある」二一人、「ない」一五人。

キリスト教系では一三人が感じたことがあり、仏教  
系では三人。「その他」グループで四人。そして「な  
んとも言えない」グループで一人。「一般にはできな  
いことだと思う」のは五人。キリスト教系グループで  
のあるという人たちのコメント・

「かつて神ありと賭けた、というHさん・「強烈  
な体験ではなく、長い眼で見神にとらえられている  
と感じるときに」、ある。

「生育過程では宗教的な環境はなかった、というN  
さん・「神の臨在というのが例えばクウェーカー派  
的な恍惚状態、陶酔感を意味するのであれば、ない。  
自分としてはそちらの方はシャーマニズムの系譜上に  
あって必ずしもキリスト教の特色ではないと思ってい  
る」

この経験は言葉にしにくいものなので、コメントを加えた人はわずかであった。仏教系の〇さんはそのむずかしいことを真摯に試みている。・

―「神秘体験の絶頂期は一、二ヶ月位続き、草や花のようなものが、世界のすべてのものが意味をもって存在していることを、語りかけてきました。そのことも神の臨在と違ってよいかと思いません。教典の中に親鸞の肉声が聞こえたと思うことは数年続き、最初ほどではない小さい体験を二回ほどしたと思います。そうした臨在感、応答は七、八年ほど続きましたが、肉親との間に父母の老後の介護や金銭をめぐる問題が生じ、つらさや恨みの思いを抑えることができず、自分を失い応答が途切れて六年になり、未だに取り戻せません。私の神秘体験は、自分の生き方について（自覚せず）にある誓いを立てたことにより与えられたことと思いますが、“どうしてこの私がこんな目に会わねばならないのか”という恨みの思いはその誓いに背くものであったことを知りました。といつても“その存在”が罰を当てたということではありません。私の方が応答可能な波長からはずれてしまったということです。いま、坐禅で自分を取り戻そうとしていますが、母の介護で睡眠不足と強いストレスが掛かっていることでもあり、当分無理でしょう。ですがいったんその存在

を知り、自分の生の依ってくるところ帰するところを知ったため絶望するということはありません。人間の信仰生活にとつて心身のゆとりがどれほど大切かを実感しています。立花隆さんの宇宙飛行士についてのレポートで、秒単位の超多忙生活を続けてきた飛行士がある時ポツと何もしないでいるわずかの時間に“神の臨在”、“掛け替えのない生命を育む舞台としての地球の大切さ”に気づかされたということに大切な示唆があると思います。

こうした体験は、条件さえあれば誰にでもできることであり、人間にとつて、自分―世界とは何かということに目覚めることだから、最も大切なことです。けれどもまた、忙しく動きまわっていることを生き甲斐とするような現代人の考えとは対極にありますから、難しいことと思います。」

問一四、死後の世界はあると思いますか。

「あると確信している」が三人。「あると思う」が二三人。「ないと思う」一四人。

「わからない」と加えて書いた人が五人。キリスト教系では確信一人、ある九人、ない二人。仏教系では順番に確信一人、ある六人、ない三人。「その他」グ

ループでは確信一人、ある六人、ない一人。「なんとも言えない」グループでは確信〇人、ある二人、ない六人。

この問に対し、「余り考えてみたことがない」し、「無関心」、あるいは「このようにはつきり言葉に出来ない世界だ」と思う。理性的に答られるものでない」というキリスト教系グループからの回答がある。仏教系では、「ない」としてさらに「死後しばらくはあると思う」と加えている例や、(次の問一五も含めて)イエス・ノーの選択をせず、「もしあつたとしてもそれで現世の人々に救いが得られるなら人に説くべきだ」と思うが悪しき業論のようなものになりかねないので、あまりそれらの事に触れるべきではなく、現世に生きているのだから現世の事についてもっと考えるべきだと思う」との回答があつた。「その他」グループに属する例のK、「古典」さんは自分の直感をたいせつにする態度がここでも現れていて、ある、としたあと「何となくあるような気がする」と書いている。この態度は、目に見えない世界にたいせつなものがあると気がついた人の、健全な自己信頼、といえよう。

「なんとも言えない」グループのうち、「ない」とした人が、「人間の認識できる形での世界としては無いと思う」、あるいは、ない「が、死した、身近な存

在だつた者の生存中の意志や思い、考えを、こちらが信仰に近い思いで、イメージ化してしまう」。

○さん・ー「死後の世界はそのまま生まれる(流転に入る)以前の世界であり、実体的に存在する世界ではない。といえれば私達のこの世界も私達の目に写るままに存在しているものではない。すべては光Ⅱエネルギーが仮の姿を取っているだけのものと思ひます。この振動する光になることは、言葉に尽くせない喜びと自分も大きなリンクの一員であるという存在の喜びのようなものがあるようです。

この喜びは臨死体験によつて死後の世界は友愛と喜びに満ちているとの体験に通じていると思ひます。ですが、臨死体験は宗教的な神秘体験とすつには足りないもの(人間の生き方についての問い)、挾雑物(私を見て私とは何か。向こう側で私を迎えてくれる親族や知人とは。私の場合は不特定の姉妹)があると感じます」

問一五、輪廻を信じますか。

「確信している」三人、「信じる」一二人、「信じない」二三人、「わからない」と書いた人九人。

確信しているのは仏教系に二人、「その他」に一人。信じる人は「その他」に五人、仏教系五人、そして

キリスト教系一人。そして「なんとも言えない」グループに一人いた。

信じない人はキリスト教系に一三人、「なんとも言えない」グループに五人、仏教系に二人、「その他」グループに二人、「(神仏・を)信じていない」グループに一人。

仏教系で選択肢から選ばず、「どちらかと言うと否定的。(個体そのものは輪廻しないと思っている)」、「死後の世界はあると思うのだがそこまではまだなんとも言えない」と二人からコメントがあつた。

「古典」さんは信じる。「信じていいと思っている」と、ここでも彼女らしいのびのびした回答だ。

「なんとも言えない」グループのWさんは信じない。「が、生まれかわり人生をやり直したい」と切実。

仏教系のOさん・「仏教では人間を霊と肉体の二元論的存在としない。霊と肉体を通しての環境(どういふ父母の遺伝子を持つかも知み、体験によってさらにその人の体験も違ってくる)も人間の一部分であるとする。厳密に言えば“霊”というのも問題があるが。私はそれをその人なりの波長をもったエネルギーと理解しています。その波長はその人の生き方によって変化しており、根源のそれと合えば、何らかの応答が得

られ、完全に合致すればやがて根源に還つてゆく。その波長から逸れてゆけば、次第にエネルギー量が少なくなり暗黒の虚無に吸い込まれ消滅してしまうこともある。仏教では“無宿善の器”とはこの消滅へ向かう存在だと思ひます。

このように私は輪廻を確信していますが、世間でいわれるものとは違つと、自分の前世がどんな問題をもつたものは、ほのかに自分に推測がつくだけで、霊能者などが、この人の前世は誰々といえるようなものではないと思ひます」

問一六、家族など「とくに大切にしている人」のなか  
に、あなたと同じ信仰をもつた人がいますか。

「いる」二五人、「いない」一三人。

コメントは「古典」さんだけ。・「母、恩師。入り口は別だが中味に共通するものを感じる」

問一七、身近な人たちに伝えようとしていますか。

「している」一八人、「していない」一六人、「あきらめている」二人。

「していない」が、「必要と思う時にはすることがある」、「している」が、「但し不熱心である」とか、「している」、「しかし慎重すぎて結果的には、三し

ていない”になってしまふ”などの回答のあいだの距離はたいしてなさそうである。「あきらめている」と同時に「している」人も。つまりしている、としていない、のあいだにあまり大きな違いがあるとは思えない。実態を客観的にひとことではいえないのであるから、姿勢としてどんな態度で他者に接しているかを答えた人が多いことと思われる。

言葉の定義が必要であると考えるキリスト教系のGさんは「伝える」とは「どういう形を指すのでしょうか。存在自体が伝達であるとするばすべての人は伝える器だと思えます」。別のキリスト教系のSさんは「いる」、「母、弟、妻は長年、かつて自分が通ったキ教会へいつているから、これをもって同じ信仰とみることもできると思うが社会観や世界観の違い故に、信仰に関する“悩みを共有できる”には至らぬのが、実情」。別のキリスト教系のなかには「身近な一は言葉によるよりもそのうしろ姿に証があると思う」。「人と場合による」。「通じそうな人にはしゃべる」。

キリスト教系のYさんはもつとも積極的な態度である。身近な人たちだけでなく、「誰でも関わった人」に伝えようとしている。そして「伝えることが好き。伝えることが楽しい」とのこと。

仏教系で、「子供たちに」伝えようとしている。

仏教系Oさんは「あきらめている」。「しかしあきらめきれないからこの回答を書いています」。「神秘体験は言葉を越えた体験なので、自分の体験を誤りなく言葉にするのも難しいし、正しく受け取ってもらうのもなお難しい。また宗教的な神秘体験と今流行の“気”や“超能力”との関係がよくわかりませんし、興味本位や過剰な期待はこまります。一番困るのがいましているような、言葉を越えた体験を言葉にすることで、体験を自分の意識で解釈してしまい、体験の純粹さを失うこと。

ただこうした機会を生かしたい気持ちもあります。私の望むことはそうして体験に通じた人に科学的というか、客観的な態度で、なるべく多くのサンプルを集めて比較、相対化してもらいたいということです。本当はあるシステムに従って用意した質問を直接被験者に、被験者が心の内で自分の体験を粉飾する時間を与えないくらい次々とぶつけて、被験者の意識を越えたところから純粹な形で、取り出してくれるのがいいような気がしますが・・・」

問一八、伝えるのはなぜ難しいのでしょうか。

もつとも多いのが「あまりにも大切なことなので、気軽に話ができない」で一五人。あとは「相手ははっ

きりと拒絶を示す」六人、「非科学的だと嫌う」四人、「学校教育で教えないから」二人、「拒絶が恐くて話さない」二人。

キリスト教系・・・

―「宗教が歴史上及び現代においておかしている“罪”について非常に批判的である」

―「自分のキリスト教観が世間一般のキ教に対する宗教的期待と少しずれているのでは？という思いがあり、気軽に話ができない」

―「相手の信じている事柄、よりどころとしている生活原理についても尊重すべきだと思う。独善的になつては元も子もない」

―「相手が（身近に）伝える状況にない」

―「必要を感じない。現実の“キリスト教”はむしろ矛盾を追認していると思うので薦められない」

―「互いに他者に知られたくない部分までの内面告白となつてしまうので、ヘタをすれば傷つけ合う」

―「信仰とは自分で獲得するものだと思うから」

（伝えようとはしない）

こうした伝えることへの否定的な態度が圧倒的であるが、なかには本人の明るい雰囲気の影響を与えている例もある。

―「全然難しいと感じたことなし。楽しくてしかた

ない。皆も喜んで聞いてくれるし、どうしてそんなにいつも幸せそうなのとか、相手の方から聞きたがる」

仏教系・・・

―「それほど人間社会が複雑混迷している」

―「子供たちはなかなか聞く耳をもたない」

―「日本があまりに物にあふれ過ぎて、（私の所属教団についていえば）教団自体即物的になつていいる所がある様に感じる。それら既成宗教が過去に歴史的誤りを犯している場合が多く、そういつたことで、疑問を抱いている人も多いただろうし、又、その既成教団が過去に対してはつきりとした解答を出していない場合が多いというのも理由のひとつではないかと思う。又、個人レベルでそういう事に積極的になろうとすると、教団側から他に知られない形で圧力を加えられる場合があるので、なおさら動きのとれぬ状況になり易い。それに安易な布教があまりに多すぎるのではないかと思う。指導者自身もつとあらゆる事を学ぶべきではないかと感じる。宗教の毒性についてもつと敏感になるべきではないかと思う」

「その他」

―「言葉で伝えられない」

「無理しないでわかる人には話す程度で私は満足している。押しつけるものではないが時に淋しいとも思うがまあこんなものだ」（あの元気な「古典」さん）

問一九、所属組織の有無にかかわらず、信仰を確認する場がありますか。

「頻繁にある」八人、「月一回程度」八人、「週一回程度」四人、「たまに」四人、「年に一回程度」一人、「お墓参りをするとき」三人。そして「ない」が一二人。

キリスト教系のなかには「ほぼ毎日どこかの集会もしくは学びの場に出席している」。仏教系では「自宅に仏壇。神棚がある」。五つのグループのうち「なんとも言えない」グループに「ない」がいちばん多かったのは、そうした場を求める思いがあるからではないか。

問二〇、五〇年後、人間の性質はよくなっていると思いますか。

「変わらないと思う」三〇人。「むしろ悪くなっているだろう」が一人。「よくなっていると思う」は四人だけ。

キリスト教系では、四という項目を加えて「答えよ

うもない」とした人がいた。仏教系のコメントは、

「生活時間の早さ、情報の多さ、金銭万能などでますます心のゆとりが失われるから」悪くなっているだろう。あるいは四として加え、「よい悪いの価値はつけられないが変化していると思う」

「その他」グループに属する「古典」さんは「よくなっていると思」のあとの「う」を消して、「いたい」と直し、「それには勇気を持って生きていたい」。さすが！

問二一、宇宙にはわれわれのほかにも高度に発達した生命体があると思いますか。

「確信する」二人、「思う」一八人、「わからない」二二人、「思わない」四人。

これらの選択肢に加えて、「そういうことは考えないことにしている（人間の分を超えることを考えることだと思うので）」とはキリスト教系のDさんの回答であるが、ほかにも「どう生きるかに関心がある」として、「わからない」という例がある。

「思う」とした人のコメントで、「高度のstageか不明だけれど、人間に近い生物はいる」。

「確信する」禅宗の仏教徒Eさんは、「それを高度とか上下判断するのに何を基準とするかはわからない

し、又価値判断すべきなのかどうかわからないが実際にUFOを見た事があるので、そう感じる。(これを他人に話すと変人扱いされるが、事実見たので仕方ない)。

「その他」グループ、ニューエイジのPさんの話は興味深い。「地球人も宇宙人の一種である。地球のなかでも魂の発達レベルのいろんな人がいつしよに住んでいるが、他の星にまで目を向けるとさらに驚くほど多様な差があり想像を越えている。近づく危険な人たちから、神様かと思うほど発達した人たちまで。輪廻転生の数が多く古い魂ほど、成長している。今、地球人は急激な質的転換のときにきていて、宇宙の意識体から神様ほどの愛にあふれたやさしいことばでアドバイスをもらい、瞑想し自己を振り返っていくつもの前世から持ち越した、あるいは今世でつくった魂の傷を癒し、愛に基づいた精神的な成長を意識的にはかっている人が少しづつ増えている」

問二二、近い将来、日本人はもつと「神的存在」を信じるようになると思いますか。

「思わない」二十九人、「思う」九人、「ぜひ、そうなつてほしい」九人。

思わない人が過半数であり、思わない人のなかには

「ぜひ、そうなつてほしい」と重ねた例がいくつかある。

キリスト教系…「問の意図が分からない。」「神的存在」をどの様に解するか。「信じる」とは単にあるなしのことか、又は宗教的観念が普及するということが「日本人は既に充分」神的存在」を信じている。むしろ信じ過ぎているとも言えると思う」

仏教系…「これは最も選べない質問である」「どちらでも良いと思う。もしその”神的存在”の名のもとに過去の大战のようなあやまちを犯すことになるのなら信じるようになって欲しくはない」

問二三、次の世代にどうしても伝えておきたい信念はどんなことですか。

キリスト教系では、神的なものへの畏敬の念をもつてほしい、物質主義から離れる必要性、などを指摘する声が目立った。

「歴史を支配している存在があるということ、そして人間も導く存在のあること」

「難しい問題であるが一言で言うならイエスによつて実践された”隣人を愛する”という精神。またそれによる世界観」「キリスト教とか宗教に拘りなく神的なものに対する畏怖の念はぜひとも必要だと

「いうこと」

「人々は神の前に平等であること。男女は互いに對等の關係であること。所有欲・支配欲からの解放」

「マテリアリストの他にも道があることを伝えたい」

「お金やモノがどれほど人を幸福にできるか、ということ」

「超越神におそれを持ち、人間の考える科学の限界を知ること」・「汝の隣人を愛せ。他人の為に働け」

「信仰をもち神の物としてすべてのもの大地自然人間を大切に愛し、すべての人々に平安を、すべての国々に平和を祈りつづけてほしい。正義の為に働けるために・・・」・「神を仲立ちとしての平和。神に依って培われる人間の平等」

「イエスの根源志向」

「自分の子供にはいずれ伝えたいと思う、自らの」  
「信仰的観念。」イエス・キリストの臨在」というものがどういう形でかは知らぬが今後五〇年から一〇〇年位の間にはあるだろうと自分が思っていること。ただしこれはノストラダムスの例の予言とは全く無關係」

「次の世代のことは次の世代の問題。今を生きる私たちに必要なことは今の私たちが幸せに生きることを考えること。今の価値観が”次の世代”においても

同じことは有り得ない。今の”正しさ”を次に押し付けることは控えるべきだと思う」

仏教系では平等、浄化、自己肯定、などがキーワードであろうか。

「信仰は素晴らしいことだということ」・「魂を少しでも浄らかにして次世代へ渡していくことの大切さ。それが人類全体を浄化していく根本になる」

「自分があるがままで、自由な信念を貫いて生きていく様な社会になるように男も女も努力してほしい」

「戦争も差別もない解放された世界の実現を願っていつてほしい」・「ヒトは万物の靈長ではなく、自然（宇宙という一つの生命体）の一部であるということ。ヒトは人類、性差を超えて平等であるということ」・「皆平等であるということ。どんな優れた理念、宗教、哲学も時代的背景にしばられる場合があり、絶えず今生きている人間自体が考え探つていかなばならない。一般にいわゆる先進国と呼ばれる国々の文化・文明が必ずしも全てにおいて正しいとはいえない。・・・などということ」

「人間は自分一人では存在しない。思いやりをもって人に接しなさい。先祖を大切に」・「一度だけの人生を悔いのないように毎日きちんと生きること」

「宗教」を迷信じみたもの現世利己的なもの、祈禱まじないの類と思いきんで多くのわたしたち世代から、この混合している認識を選びわけて、伝統の姿を掴みとり生かすことに努力する」

そしてOさん……「人間は自分の選択によって自分の人生（運命）を造っていくもの、たとえば他人に無理強いされたり、社会の風潮に流されてしたことでも、最終的にはそのことも本人が選んだことであり、結果はその人に帰ってくる。どうせなら積極的に自分の人生、自分の運命を選んでいったほうがいいのでは。」

人間を超えた存在は必ずあるし、人間の運命はこの生死を越えて継続する。選択に迷う時にはそのことを頭において行動してほしい。

犬も猫も虫も私達と根源の命を共有する存在である。命が犬、猫、虫という自由の少ない環境に生まれついているのであり、あらゆる命に対する慈しみと、その命を損なわなければ生きていけない人間の悲しみが宗教の根本にあると思う。

真理に基づいた生き方をすれば、世の大多数と背きあう時もある。人間の歴史を前に進めているのはその少数者である。困難な時に彼らに連帯する勇気があるだろうか。せめてその人たちの正しさを認め（自分と

生き方の違う人の正しさを認めるのはそれ自体困難だが）、石を投げる者には加わらぬこと。そのことでもあなたも彼らの歩みの端に加わることができる」

「その他」グループ以降は俄然、伝えたいことをもつ人が少なくなる。

「英知」「日本国憲法や国際人権宣言」「自己にとらわれず”生きること”の意味（私自身今模索しているところですが……）」、「愛と平和を尊重する信仰なら、人々のもつ信仰を尊敬し、またそこから学ぶことがあるという態度をもって、色々な人々に会うことによって、より充実した人生が送れると思います」

「人間だけでなくあらゆる自然と共同に生きている。共同体感覚を養う事」というのは「古典」さん。

「人生を明るくとらえることがいかに深い意味をもつかを探求し確信に至ってほしい」というのはNさん。「信念というのは伝えるものではないと思う」

「なんとも言えない」グループからは：

「生への畏敬」「己れを信じ他者を尊重する。自己を理性や思想だけの狭い存在ととらえないこと」「すべて凝視を大事にすることです」

「信じない」グループからはまったくメッセージがない。

問二四、広く宗教関連のことで、自由に意見を述べてください。

ここで全般にいえることは、既存の教会、教団に対する否定的な意見がひじょうに多いことである。

なかには「宗教」という名の教えそのものと、それを伝達する方法として成立させた組織である「宗教団体」「教団」という人間の集まりを指す語を混乱したまま用いたものが少なくなかった。しかし「宗教は抑圧の手段として使われてきた」「個を消し去る作用を果たしてきた」、「人を救うという大義名文のもとに多くの人に自己犠牲を強いる結果におちいり易い」などという表現の宗教批判をみると、やはり宗教的な教え・教義を伝える人間の行為に含まれる誤りであるので、両者はわかちがたいものとなっている。神父による婚外子差別を批判する声なども、教義運用にあたる人間の態度が誤っていることへの批判である。

宗教団体批判の中身をまとめると、「宗教団体の自己保身など体質的悪への批判」、「他の宗派・宗教と

の対話を求めない閉鎖性批判」、「宗教団体が政治権力をもつこと自体への批判」の三つである。

ここでおもしろいのは、既存の宗教と既存の宗教団体を乗りこえる視点をもった声が、こうした問題を解決する方向性を示唆し、あるべき未来の宗教の姿を提示している点である。

この視点をまとめると、差異よりも共通点に目をむけ、多様性を認めあい、解放の原動力となる宗教を望む、というものである。そうした意見の代表的な例をあげてみよう。

「違いを認めた上で人間らしい連帯をつくっていきたい」

「宗教を越えてもつと根元的なものへの帰依という点で融和できないものか」「救霊・伝道は奢りではないか。相手のあるがままを受け入れて尊重する相対的な視点が必要」

「解放の力としての宗教を再評価したい」  
「対外的人権支援活動、諸宗教との対話という国際性」

「平和を願うなら女性は行動を」

そしてかつては組織に属するかたちでしか宗教をもてない、という思いこみがあった。しかし、男性論理が染み着き薄汚れた既存組織に問題が多すぎる現在、

そしてわたしたちがフェミニズムという確固とした立脚点をもった今、個への抑圧を人権問題としてとらえる視点が幅広く受け入れられるようになったこの時代、「(宗教は)神と個人との関係、と思っている」「宗教は自ら創り出すもの、と思うようになった」という発言にみられるような、自分と「神仏」との直接的なつながりに焦点をおく人のことばには、強烈な説得力がある。

最後に。たった一つ、「神を信頼して生きることが楽しい!」というとても明るいキリスト者の意見があり、高次の存在とともに生きる喜びが表現されていた。

☆☆☆アンケート用紙☆☆☆

「フェミニズム・宗教・平和の会」会員の皆様へ

宗教意識アンケート調査のお願い

この調査は、宗教性がわたしたちの心のなかでどのように生きているか、日常生活のなかでどう姿をとっているか、を明らかにすることを目的としています。

これまでにない調査です。わたしたち「フェミニズム・宗教・平和の会」の会員にとつてとても興味深いものになると思います。次号九月号に結果と分析及び数人によるコメントを載せますので全体像をお見せできます。もちろん回答者個人をアイデンティファイできるような情報はだしません。調査はこれをパイロットスタディとし、今後公的助成金を申請して、(もらえれば!)より大規模な調査を予定しています。その意味でも、ぜひご協力ください。(いっしょにやりたいかたはお申し出ください)。お忙しいなか恐縮ですが、ご回答のうえ、返信封筒の宛名までご返送お願い申し上げます。

(中山、協力者・奥田)

\* ㊦ 複数該当するのであれば、そのまま複数回答にしてください。

\* 説明を加えたいときは、自由に、空欄にお書きく

ださい。

あなたの年齢は？・

二〇代・三〇代・四〇代・六〇代以上

性別・ 女、男

一・神仏、あるいは「神的な存在」、「超越的な者」

を信じていますか。

一 信じている

二 信じていない

三 なんとも言えない

二・どんなかたちで信じていますか。

一 キリスト教

二 仏教

三 神道

四 教祖信仰

五 祖先崇拜

六 お寺や神社にいったときおみくじを引く

七 あの世の存在を信じている

八 ニューエイジ

九 その他

三・(広い意味で)「神的な存在」、を意識してから何年になりますか。

一 数カ月

二 一〜五年

三 五〜一〇年

四 一〇年以上

四・「神的な存在」を確信してから何年になりますか。

一 数カ月

二 一〜五年

三 五〜一〇年

四 一〇年以上

五 確信しているとは言えない

五・日常生活のなかであなたの信仰(広い意味で)は、  
どういう意味をもっていますか。

一 安らぎ

二 励まし

三 慰め

四 反省

五 規範

六 (信念に基づく行動への) 力を得る  
七 その他

六・確信を深めてくれた体験はどんなものですか

- 一 書物
- 二 人の話
- 三 自身の体験
- 四 その他

七・聖書・経典はだいたいそのまま正しいと信じていますか

- 一 そう思う
- 二 書かれた時代を反映していて問題があると思う
- 三 時代に合わせて書き替えるべきだ

八・宗派レベルにしる、信仰を変更した経験がありますか。

- 一 一回
- 二 数回
- 三 何度も

二 ない

九・変更の理由は？

- 一 教義に疑問を持った
- 二 (仲間の) 人に疑問をもった
- 三 その他

一〇・どういう機会に祈りますか。

- 一 毎日
- 二 日曜日とか決まった日に
- 三 なにかできごとがあったとき
- 四 困ったとき

一一・その祈りの内容は？

- 一 感謝
- 二 願い
- 三 決意
- 四 話しかけ
- 五 問いかけ
- 六 祈りというより「神的存在」を「思う」

一二・その時間は一回何分ぐらいですか？

- 一 数秒

二 数分

三 数時間

一三・神の臨在を感じたことがありますか。

一 ある

二 ない

三 一般にはできないことだと思ふ

一四・死後の世界はありますか。

一 あると思ふ

二 ないと思ふ

三 あると確信している

一五・輪廻を信じますか

一 信じる

二 信じない

三 確信している

一六・家族など「とくに大切にしている人」のなかに、

あなたと同じ信仰をもった人がいますか

一 いる

二 いない

一七・身近な人達に伝えようとしていますか

一 している

二 あきらめている

一八・伝えるのはなぜ難しいのでしょうか

一 あまりにも大切なことなので、気軽に話ができ

きない

二 相手はつきりと拒絶を示す

三 学校教育で教えないから

四 非科学的だと嫌う

五 拒絶が恐くて話さない

一九・所属組織の有無にかかわらず、信仰を確認する場がありますか。

一 ある 一 頻繁にある

一 二 週一回程度

一 三 月一回程度

一 四 たまに

一 五 年に一回程度

一 六 お墓参りをするとき

二 ない

二〇・五十年後、人間の性質はよくなっていると思いますか。

一 よくなっていると思ふ

二 変わらないと思う

三 むしろ悪くなっているだろう

二二・宇宙にはわれわれのほかに高度に発達した生命体があると思いますか。

一 思う

二 思わない

三 確信する

四 わからない

二三・近い将来、日本人はもつと「神的存在」を信じるようになると思いますか。

一 思う

二 思わない

三 ぜび、そうなってほしい

二三・次の世代にどうしても伝えておきたい信念はどんなことですか。

二四・広く宗教関連のことで、自由に意見を述べてください。

(1) アンケートの結果を見て

奥田 暁子

調査結果の詳しい分析は中山さんに一任して、わたしは結果を見て感じたことを一つ二つ書いてみたい。

まず最初に、回答者がフェミニズム・宗教・平和の会の会員であることから、当然予想されたことではあったが、既成宗教に批判的な意見が多かった。とくに宗教団体のあり方（ピラミッド型の権力構造、安易な布教のあり方、過去に犯した過ちへの自己批判がないことなど）に対しては多くの人が厳しく批判していた。また、聖書や教典などを絶対視せず、書かれた時代の制約があるとする視点や、政教分離の不徹底や異教同士の対立を憂慮する声など、全体として、現在の宗教に対して厳しい意見が多かった。それは裏を返せば、おそらく既成宗教に問題を感じている人がこの会に参加しているということだろう。

その一方で、既成宗教への批判がそのまま宗教を否定することにはなっていない。むしろ、回答者は個人としては非常に宗教的であるという印象をもった。特定の宗教を信じていると答えた人は過半数の三三人であったが、この人びとはアンケート結果からみる限り、

祈りを大切にしているし、祈りの内容も「感謝、願い、決意、神への応答」など、きわめて宗教的である。また、神の臨在を感じている人も多い。物質万能の現在の日本社会の風潮を憂慮する声も多かった。以上のことから宗教（この言葉についてはアレルギーを示した人が何人かいたが）や人間を超えた存在を信じる人たちがだからこそ、墮落した既存宗教のあり方に批判的にならざるを得ないということができらるだろう。

宗教に対するそのような姿勢は当然信仰のあり方にも反映する。書物や人の話を通してよりも自分の体験を通して信仰が深められたという人が多かったのは、回答者が信仰を主体的、自覚的に獲得しているためだと思ふ。

信仰とはもともと神（や超越者）と一対一で向き合って自分で獲得するものだと思うが、そのような主体的信仰を持つ人は実際には少数者である。各種の世論調査で仏教や神道を信じている人の数が日本の総人口を上回るという奇妙な結果がでてくるが、この現象は日本人の信仰がいかに受動的であるかを物語っているのではないだろうか。その点で、今回のアンケートの回答者の宗教に対する姿勢はきわめて自覚的、自律的であると思つた。

「伝道」は多くの宗教団体にとって信者獲得のプロ

セスとして重視されているが、今回ははっきりと意見が二分した。価値観が多様化している時代に従来通りの伝道のあり方に疑問を感じている人が多いのだと思ふ。

アンケート結果を見てわたしがとくに面白いと思つたのは、設問五の「信仰のもつ意味」の答えとして、「行動への力を得る」が最も多かったことである。

「行動」の内容が分からないので断定はできないが、普通は宗教というと、慰めとかやすらぎなど精神の領域の問題として語られることが多いので、このような回答はかなりユニークである。もちろん宗教を信じることによつて慰めやすらぎを得ることも大切なことであり、それを否定するつもりはないが、しかし、もしそれだけなら、宗教は社会的な問題とはいっさい関係なく、個人の魂の救済だけを考えていればよいということになる。この問題はパウロの言う、「信仰のみ」をどう解釈するかの問題であり、キリスト者の間でも見解は分かれているが、わたしは「人が義とされるのは行いによるのであつて、信仰のみによるのではない」（ヤコブ書二：二四）という立場が重要だと思つている。後者の立場に立つ解放の神学者たちが権力を握っている人びとから敵視され、社会的に差別された無力な人びとから受け入れられているのを見ると、宗教の

目指すべき方向は自ずと明らかだと思ふ。そしてまた、既成宗教の多くがその方向を目指していないことも明らかである。その意味で、回答者の宗教観はマジヨリテイの宗教観と大きく違つて見えていいのではないだろうか。

おそらく宗教に対するこのような姿勢が回答者の現実志向を導き出しているのだと思う。調査結果からみる限り、宗教とは決して「あの世」のためのものと考えられていたのではなく（しかし、死後の世界には肯定的な人が多かった）、今日をいかに生きるか、もつと言へば今日の不条理をいかに解決できるか、に宗教の役割があると考えている人が多いと言えるのではないだろうか。

最後に、このような調査では言葉の定義をもう少し厳密にすべきだと感じた。とくに「神」とか「神的存在」について、どう回答していいかわからないという意見がいくつもあつた。ある回答者の指摘にもあつたように、これらの言葉はキリスト教的であり、仏教その他の宗教を信じている人は違和感をもたれたのではないかと思う。また、同じ仏教でも宗派によっては言葉の受け取り方が違い、回答が難しかったようである。共通の言葉を使うにはどうすればいいか、この問題は今後の課題だろう。

## (2) アンケートの結果を見て

中村 恭子

中山さんの宗教意識アンケート調査票を手にした時、昨年からのこのようなアンケートをいくつかのグループで実施し、試行錯誤してきた私は、大変興味をそらされた。そして、どのような結果が出るかを心待ちしていたのである。

まず、回答率五六、七%は、平均的回収率より高率で、成功といえるであろう。もつとも、日本の宗教教団や大学などでは、半強制的ムードがあるのか、一〇〇%にかなり近い回収率があげられるが、海外ではこのようなことは期待できない。拒否する自由も存在するのである。匿名であってもプライバシーにふれる質問に答えたくない気持ちもあるし、単に時間が無い、煩わしいという人もあるかも知れない。また、設問の趣旨がはつきりしない、設問が不適切、考え方が違うなどの理由で協力してもらえないこともある。宗教的多元社会である日本において宗教調査をする場合の最難点は、宗教用語に対するコンセンサスがないことであろう。たとえば「神」、「霊」などのキー・ワードは、さまざまな意味に解されるので、協力的回答者は、

設問を読み、設問の意図するところを理解しようと努力しながら答えるのが常である。

選択肢を選ぶにとどまらず、多くの回答者が長文の回答を寄せたのは、本会員の宗教意識が高いこと、非常に協力的であることを示していると思われる。

設問についての私の印象は「あまりにキリスト教的」という一言に尽きる。たとえば、問二選択肢の「教祖信仰」「祖先崇拜」などが宗教名と並んでいると、前者は新宗教を意味しているのかとも考えたが、そうだとすれば誤解、偏見と言われてもしかたがない。教祖が教えを説いた創唱宗教において、なんらかの教祖信仰がない宗教は考えられないのである。「祖先崇拜」も「崇拜」が絶対神に対する場合と同様に考えられ、批判された過去があるので、「先祖祭祀」とすれば答えやすいと思う。日本人一般の重層信仰的傾向からすれば、複数選択は当然だと思われるが、選択肢をもう少し検討すべきである。「神仏」「神的存在」も人格神を考えるので、抵抗を感じる人がいるだろう。入信、堅信、回心、改宗などの体験も、キリスト教や新宗教の信者ははつきり意識されているかもしれないが、宗教的世界観のなかで自然に生きている人は答えにくいであろう。問一〇、一一、一二、一三などもキリスト

教的である。問一五の「輪廻」のような仏教用語をとくに持ち込まないで、正確になるが、「生まれ変わる」というような日常語にする方がよいのではないだろうか。

以上は私自信が取り組んでいる問題でもあり、教えられ、また、考えさせられたことである。

### (3) コメントーあるいは単なる感想

薄井篤子

「アンケート調査へのお願い」にあつた様に、日常生活の中での宗教意識というものは把握するのが難しく、そのためか参考になるような調査も意外と少ないようです。私自身も非常に関心あるテーマなので、実際の調査にはまだ踏切つていません。それ故、本調査の結果には興味があります。

ただ、アンケート調査は設問が成功の鍵を握ると常々思っているため、どうしても私の関心は設問の方に向いてしまいがちでした。そのためやや重箱の隅をほじくる様なコメントになるかと思えます。

信仰の対象を「神的な存在」と表現するのは、「神仏」だけでは限定的な印象を避けるためにも致し方がないと思いますが、一方でどうしてもキリスト教的なイメージが強くなる気がするのには私だけででしょうか？三と四、さらに一三などの問いに対して例えば仏教徒の方はどのように受止めるのかしら。こうした用語は本当に難しいですね。また、これらの設問の違いがやや掴みにくい気がしました。四の「神的な存在の確信」と一、三の「神の臨在を感じたこと」という内容は私にとつては重なり会うように思えます。そのため、しばらく間を置いて再度似たような問いを受ける気がします。

設問の順序について言えば、七、八、九の三問の場所がやや唐突のように思います。内面的な側面に迫るものとして、六の次に一〇を連続して問掛けたほうが効果的ではないでしょうか？一方、この三問は個人の宗教意識といわゆる宗教的権威との齟齬に触れるものとしてアンケート全体の中でも重要な意味をもっていると思います。その意味をはつきりさせるためにも、もっと独立的に設定してもよかったですのでは？

私は「フェミニズム・宗教・平和の会」の会員の信仰について――個人的に詳しくないため、単なる思い込みかも知れないのですが――宗教を体験し思索する

中で個人的確信を深める一方で、教団などの権威や既成の教義体系に対して違和感を抱いている方々が多いのではないかと常々思っていました。宗派を越えて会に集わせているものは、いずれの宗教も持つ差別性への違和感であり、告発であると。よって私自身としては、そうした特徴がより明白に出るような設問が効果的ではないかという発想をしてみます。「お願い」を読み返してみれば、今後より大規模な調査が想定されているようなので、こうした本会の特徴にこだわるのはかえってマイナスなのでしょうか。

しかし日常生活の中の宗教意識とは、あまりに漠然だと思えます。もうすこし焦点を狭めて角度をはつきりさせた方がよいのではないのでしょうか。その一つとして、やはり性についての意識を育くむ上で宗教の教えがどのように関わってきたのかを綿密に問うことは、本会の趣旨から言っても第一に取り組む点であると考えます。性を軸にしながら個人の生と宗教の関係を整理することを通して、宗教性が日常生活の中で生きている姿を伝える、という視点をアンケートの趣旨として提示できないのでしょうか。そうした視点の現代的な重要性を主張してこそ本会でアンケート調査を行う意義があるように思うのですが。あまりこの点は強調

したくないのですか？問題意識を持った会員が集り、今まで研究会や討論を重ねてきたのですから、その成果を生かして会員外の人々に問いかけるものとしてこのアンケートを位置づけていいのでは？それはまさに日常生活の中での宗教の位置や役割に接近する方法になると思うのですが。

こうした点からアンケートに期待を寄せている私にとって、設問の二〇、二一、二二はやや違和感がありました。そこで、全体の設問を眺め、また中山さんのコメントを読みますと、ニューエイジというのか、ひとつの時代把握（または仮説？）の上に立つて構成されているように感じました。もしそうであるならば、アンケートの始めにもう少し趣旨の説明か何らかのメッセージがあったほうが、設問の理解の助けとなり、答えやすかったのでは？ただ、どうしてもこうした内容の問いに対して選択肢の中でのみ回答するのは難しいことでしょう。その意味から言って、自由な説明や意見は興味深く読みました。二四、の意見の中で既存の組織への批判が多かったようですが、これは予想され得ることであり、繰り返しになりますが、七や九らと関連してもうすこし設問を展開してもいいのでは、と思いました。

#### (4) アンケートを見て

蓮月

アンケートの感想をということですが、私にとつては最後の「このアンケートの問題点についての指摘」ぐらいが興味あるところかな？アンケート全体が、何か「神的存在」が、実体的な救世主で、特定の礼拝形式で祈れるようなものを対象に行っているという感じで、違和感があります。

私は、仏教が真に伝えたいものを引き継ぎ、時代社会の中でまがって来たことを批判する、という意味で、仏教者を名のつていきます。

#### (5) アンケートの結果を見て

鶴岡 瑛

自由にコメントなり、感想を書いてよいということですので、まとまりのないものになるかもしれませんが、常日頃感じていることも含め書かせていただきます

す。

最初に、回答率五六、七%という数字は、はたして多いのでしょうか、少ないのでしょうか。“宗教”をはつきり掲げた会での、この数字はちよつと少ないように思えるし、定義云々の問題も出たように、こうした微妙な“答えにくい”設問に真面目に答えることは、自分の矛盾に真向かうしんどい作業であることを考慮すれば、多いとも言えます。

同じ疑問が、問一の、(厳格な定義は別として)「神仏あるいは神的・超越的な存在」を信じているか否か、についてもいえると思います。否定と無回答併せて四で、三三が肯定、六五%ということになりますか。これが日本人一般と比較して多いか少ないかは、“信じる”ことの内容次第、それも“何を信じるか”より“どのように信じているか”が問題であると考えます。

ある調査では、宗教法人の信者数を合わせると、日本人の人口の二倍にもなってしまうとか。またかなり以前の調査ですが、日本は仏教国だといわれながら、自分が仏教を信じていると認めている人は意外に少ないという結果が出たそうです。神道、キリストについても同じです。けれども漠然と神や仏は存在すると思っている人、信仰を持つことはいいことだと感じてい

る人は多いそうです。これを日本人の宗教性は高いとみるか、低いと見るかは見方によります。私などは、初詣で神社、仏閣にお参りする。受験だから、お賽銭を上げてお守りをもらってくる、お稲荷さんの前でもんとなく手を合わせた気持ちになったとかいうような、自分の主体をこつちに置いておいて、自分本位に、いわば一時的に神仏を自分の目的のために利用するよゆうな、あり方を宗教と認めたくない気がします。問二四の個別意見でどなたかがいわれるように、日本人は宗教に“とらわれる”“のめりこむ”ことに怖れをもっていると思います。私自信、以前はそのように感じていました。今の私は、そうした目から見れば、まさに“とらわれた／＼のめりこんだ”人間でしょうが、そうは感じません。今は、人間を自由にし、解放してくれるのが、本当の宗教だと思っています。

たとえば、問一二でも一四人が、“なんともいえない”を選択していますが、これはそうしたルーズな宗教意識と同じものなのでしょうか。自分の信仰を“教祖信仰”“祖先崇拜”ときちんと認識している人が五人もいるというのは、さすがというべきでしょう。問一のNさんに見られるように、信じたいと願っているが(今は)信じられない、人も多いのではないのでしょうか。結論として、この会には宗教に関心を持ちなが

ら、既成の宗教団体のあり方に飽たらない人、既存の狭い枠に収まりきれない“何か”を求める人が多いのではないかと思えます。

この会の特徴を現していると思われるのが、問二―七、あの世の存在を信じている人の少なさです。単純にキリスト教、仏教、神道の形で信じていると自認するもの三五ポイントに対し、“あの世”の存在を信じているのは六（内キ系一、仏系二、その他二、なんともいえない一）にすぎません。一連の質問の流れで“あの世”といえば、それぞれの宗教、宗派で教えている“天国―地獄―浄土”を指すと思いますが、信仰者の大多数はそれを信じていないことになりました。私自身、そうしたものの実在を文字どおり信じているわけではありませんが、呪術やご利益信仰は別にして、現世だけで完結している信仰というものを、認めたくない気がします。なぜなら私自身の“出会いの体験”、これは阿弥陀（法蔵菩薩）の願いによって、あらゆる人が遅かれ早かれ体験することだという意味で、神秘と言いたくないので、“弥陀の光との出会い”としますが。出会った時に、私は、自分から志願して喜び勇んで光の国からこちらへきたこと、長い流転の間に自分のその志願さえ忘れてしまっていたこと、いまようやく自分の生まれた目的に到達して、この命が終われ

ばまっすぐ光の国の姉妹の元に還れる、との約束をいただきましたので“現世”だけを問題にしているのは、宗教として片手落ちだという気持ちがあるのです。

仏教の場合、釈尊は死後のことは、判断を保留され、なんとも言及されていませんし、各宗派によって考えが異なります。浄土教でさえも、文字どおりのあの世＝浄土を信じているという問題視される現在ですが、私の場合、人間はこの世だけの存在ではないという意味合いで、あの世の存在を“信じる”を選択しました。キリスト教の場合は最後の審判や天国―地獄を信じる人はもつと多いだろうと、漠然と思っていたのでこの数字には実は驚きました。この会以外の一一般のキリスト信者の場合と比較することができれば面白いと思えます。

そこで、さらにこの問いの関連質問、問一四、一五を見てみたいと思えます。ただしここでは、信じるものを持つ人達だけが問題になります。問一四で、死後の世界はあると思う、あると確信しているが併せて二五（信じるグループの内訳、キ系一〇、仏系一七、その他一六）です。問一五になると、輪廻はさすがに信じないが二三と多いのですが、信じる、確信しているも一四（同キ系一、仏系一七、その他一五）で、問二―七の“信じるグループで六”の回答と大分食い

違いがあります。これはどういうことでしょうか。

これは定義の問題、“天国―地獄―浄土”といういわば手垢にまみれた“観念”に対する反発でしょうか。イエスのいわれる“神の国”は、“天国”とはちがうものでしょうか。そのところがはつきりしません。そもそも私には旧約と新約の違い、カソリックとプロテスタントの相違がはつきりつかめないせいかもしれません。クリスチャンの方々はきっちりわけて考えておられるのでしょうか。ともかくそうした窮屈な枠のない問一四のような質問形式では、正直に内心の思いを答えられるということでしょうか。こうしたいわば矛盾した選択をされたご本人達はこのことをどう考えられますか。次回調査の場合、もう少し突っ込んでみられたらと思います。

そこで、問二で見たような傾向を持つ人の信仰生活は、どういう現れ方をするものかを問五、(日常生活の中で信仰がどういう意味を持つか)に即してみます。

まづ第一に回答数が計一四ポイントとズバ抜けて多いことが目につきます。設問中最も多い数です。また一のやすらぎ、三の慰めは同じ範疇ではないかと思いい、一括りにしてみますと三二、その内キ系一―一に仏系一―一と同数になりますが、比率としては仏系が

多くなりますね。また二と六も同じ範疇としますと計三八(内キ系一四、仏系一)で一―三グループにくらべて多いようです。仏教でいう“安心(あんじん)”は単なる安心ではなく、不動心・自在心といってよいと思います。ですから“安らぎ、慰め”を単純に消極的傾向とすることはできませんが、安慰よりも積極的傾向、宗教によつて行動の原動力を得ている人が、多いのではないかと思えます。それが今回の調査の特色でしょうか。

規範については、私の考えでは、仏教は規範そのものを教えるより、そこへ至る道程を重視する教えと考えていました。当然多いと思ったキ系が三で、仏系は五と意外な結果になりました。

また問七の“聖書、経典をだいたいそのまま正しい”と考える人の少なさも今回調査の特色ではないでしょうか。この会には、問二四にも見られるように、宗教のあり方について問題意識を持つ人が多いせいと思えます。それでも、この会にして“そう思う”人が七人も存在するとは・・・

仏教の場合はこの問題があるように思います。なぜなら仏教経典の場合は、各宗派でそれぞれ正依の経典を立て、他宗のそれに勝るといふ主張はしますが、それは“どの行(ぎょう)を選ぶか”に関連してくる

からで、キリスト教と違い、正統―異端を立てたり、異端の抹殺などということはありません。今ではすたれてしまっている宗派の經典でも、偽書といわれるものでも、一応仏説として尊重されます。だから經典は時代を下るにしたがって膨大になり、相互に矛盾する表現も存在しますし、何が仏教の核心かをほやけさせる結果となったと思います。ここで“そう思う”を選択された仏系の方も、膨大な仏典のすべてを対象にされたのではなく、多分自身の信じる經典について、だろうと思います。

私自身は二を選択し、三の書き換えには反対の立場です。理由は、ある時代にどのような偏りがあったかも、私達の歴史の一部にほかならないからです。訂正してしまえば誤りを覆い隠すことになります。また何箇所かの訂正ではすまず、全体を損なうものとなりかねない經典もかなり存在すると考えられるからです。ここに紹介されているスウェーデン方式がいいように思います。

次に問一一、祈りの内容について考えてみますと、圧倒的に多いのが感謝と願いです。日本人一般の信仰態度として不思議はありませんが。また思ったよりは仏系に“感謝”“願い”が少なく、決意、問いかけが多いのですが、これもこの会の仏教者の特色といえる

のではないのでしょうか。

この調査に見られるもう一つの傾向が、既成宗教から離れたところでの広義の宗教体験、神秘の世界との交流に対する関心にあると思います。私自身は全く宗教に関心のないところからいわゆる“神秘体験”をして、その後仏教に帰依しました。私のその体験が真正の宗教的体験といえるか証明の方法はないわけですが、自分では釈尊の悟りに通じるものがあると思っています。しかし既成仏教の側には、經典に書かれたことを伝統的な解釈に従って読み、古くから説法のなかで使われた手法に従って考える。この枠からはずれたものは、胡散くさく思う体質があります。これは多分既成仏教の側にいる人の自信のなさからくるものと思われるますが。反応は大抵わかっているのです、仏教の方の人に自分の体験は話したことはないのです。

ある時、坊守（住職の配偶者）会でお話をして、元来仏教徒ではなく、現在も何の資格ももたず、どこにも所属していないので、どういうことがきっかけで仏教に関心を持ったかを聞かれたことがあります。その時は“家庭のことやら、子供の時から色々苦しい問題があつて”と答えましたが“そういう方もいるんですね”とびつくりされて、実は私の方がびつくりしました。坊守さんには、檀家の出身の人もいますが、大抵

寺院の生まれですので、生まれたときから仏教の雰囲気につかっているので真剣に教えを“求める”ことが案外ないんだと感じたものです。僧侶についても同じで、“家業だから仕方なく僧侶になった”という人も意外に多いのではないかと思います。

話しを元に戻しますと、以上から窺われるのは、この会には単に宗教に関心があるだけではなく、既成の宗派、教会などに問題を感じている人が多いということ、教理、教義を鵜のみにせず、指導者を盲信してついでゆこうというより、神―仏にじかにつながりを求める、あるいは自分の内面の規準に照らして、自分の信仰の形を取捨選択してゆく、信仰が行動を支えるものとなっているということではないでしょうか。

問二四で、ある方のいわれる“宗教は自ら創り出すもの”という意見が、方向としては、正しいのではないのでしょうか。私自身近頃は、私事に足をとられ、低迷している時期ですが、最近ことに、どんな宗教、宗派で信じているかより、信仰者個人の内面の豊かさ、人間性が問題だと思ふようになってきました。

ではどのようにして神や仏、超越的な存在にコンタクトをとってゆくかですが、理知や論理に依るのではなく、人間の内面には、広く宇宙に遍在する真理―生命の源に呼応する何か内在することを信じる立場

から、そうしたものを写し出す鏡としての心―感性を磨いてゆきたいと思っています。その方法として私は仏教が有効だと考えています。こういう言い方は仏教を手段としているようで不遜だといわれそうですが。

また“仏教”の何を学ぶかが問題ですし、今の日本の仏教界が正しい手本になるとも思っていませんが、以下で少し仏教側の問題を考えてみます。

本来仏教では、釈尊もダルマ（法―真理）に目覚めた人間です。釈尊以後も、必ずしも同程度の体験でなくとも、そうした体験をした人々がいて、大乘経典はそうした人々の体験を反映していると信じています。

また釈尊在世時には尼僧のサンガが存在し、悟りを得たという女性の声が記録されています。残念ながらその後尼僧の地位が低下すると共に、彼女らの声も聞こえなくなりましたが。私自身は男女平等を信じていますが、それは価値として男、女に上下はないと信じる者で、男の身と女の身が同じものとは思いません。したがって同じ社会を生きてはいても、違う問題を抱えているのは当然です。これまでは圧倒的に男性の身を持つて生きている人達の声が大きく、彼らの感性―人間の感性とされてきました。それらを全否定するのではなく、女性の身にどのような世界があらわれるか実地に体験し、新しい女性経典といえるようなものを

まとめてみることはできないものでしょうか。

私はこの一年半ほど、月一回曹洞宗のお寺の坐禅会に参加しています。その程度の体験でこういうことをいうのはおこがましいことですが、こうした坐禅では（神秘体験も含めた広義の）“悟り”は得られないのではないかと思えます。けっして私は坐禅を否定しているのではなく、今のような坐禅の仕方では、大多数の人は“悟り”の一步手前で止まってしまっているのではないかとこのことです。

これは日本仏教全体に通じることですが、一にこの病んでいる社会に対する問題意識、二に意欲が不足しているようです。問題意識があるから、苦しんでいる人を救いたいという意欲が生まれます。これが僧侶の本分と思えます。そのように、仏教は人間の苦を追求することから成り立っていますが、大切な問題に真剣に立ち向かうことを今の日本の社会は“重い”“暗い”“暗い”と嫌います。仏教は、“暗い”“暗い”“暗い”と嫌います。僧侶自身も“暗い”ことを嫌い、“軽く”“軽く”“軽く”生きたいと願っているようです。明一暗は一つのセットですから、人間の暗さから目を背けることは明（智）を遠ざけることになります。ここに現在の日本の仏教の問題があると思えます。

何年前か、ある尼僧さんが、新聞に傷ついた鳥のこ

とをエッセイに書いて評判になりました。その鳥の連れ合いらしい鳥が、いつまでもその鳥を氣遣って逃げないことを、人間の夫婦や親の情になぞらえて感動的に語っておられました。それはそれでいいのですが、それが評判になって本になり、読んだ人に感動を呼んでいると読むと、世界中に矛盾が噴出し、多くの人が苦しむ時代に、日本の仏教は、いつまでもこの程度でいいのかという気がしてなりません。飢えて死ぬ子供、その母親の苦しみ、戦乱の中であまりに無惨な出来事を見聞きして心を傷つけられる子供達、栄養不足で育つ子供は、将来に大きな問題を持ち越します。日本の仏教はなぜこの人間の苦しみに目をむけないのでしょうか。日本の繁栄もこのところ陰りがでていますが、それでもまだ苦しんでいる隣人をよそ事に、自分達の幸福を追求するゆとりがあります。そのような自分、社会に対する問題意識がないから、変化をきらい現状維持を願う姿勢が出てくるものと思えます。聞法の席でしばしば聞かれる“人間には本来仏性が備わっている”とか“このままですでに救われている”との言葉も深遠な思想を含んでいるわけですが、前提になる厳しい自己や社会に対する批判がなければ、自己肯定のための言い訳にすぎません。僧侶が日常の布教活動そっちのけで、葬儀や儀式ばかりが派手になるの

も、僧侶だけのせいともいえません。檀家といわれる人達がそれを望んでいるともいえるようです。もっとも長いこと掛かって、そうした仏教徒を育ててきたのは僧侶の責任なのですが。

話が戻りますが、意欲は当然問題意識の切実さから出てくるものです。さらに集中力。いざという時にどれだけのエネルギーを出しきることができるかが、神秘体験を左右すると感じるのはです。身心の統一、安定を図り、いざという時のエネルギーを集中するための状態を整えるには、坐禅は最適と思いますが。私見ですが、現状ではむしろ、道元禅師の、“只管打坐”悟りを目的としてはいけない。坐禅することがそのまま仏の本証 という教えが、真剣に悟りを求める意欲をそいでいることになつてはいないでしょうか。いうまでもなく道元禅師も、手足が消滅するまで座り尽くしたといわれる達磨さんも、悟りへのすさまじい意欲をもつておられました。いずれも仏の教えに背く現世のありかたに問題を感じておられたからと思われまます。坐っているときにそのことを考えていなくとも、頭脳―意識で考えるよりもっと深く広く、意識下で問い続けておられたと思います。

“只管打坐”とは、悟りの体験なくしては出ない言葉です。「悟りに迷うのは衆生なり。悟りの上に悟る

ひとあり」といわれますが、そこに至らないものが徒に“妄想で悟り”を作り上げる危険と同時に、“悟り”を私（わたくし）することの危険をも戒めておられるのでしょうか。坐禅をするなら当然“悟り”を目指す意欲がなくてはならないことです。

ここで少し“出会い”の体験に深入りしてみたいと思います。

声を聞いた、光を見たといつても、本当に目、耳で見た、聞いたといえないものがあります。臨死体験では横たわっている自分を見、話を聞いたといっていますし、チベットの“死者の書”でも、死者に対して解脱するように、それができないならよりよい生へ生まれ変わってくるように、四十九日に渡つて僧侶が“水先案内”のように呼び掛ける葬送儀礼があるようです。死者は魂となつて肉体を離れ、こちらの世界の出来事を見聞きしているそうですが、死者に呼びかけると同時に、それは家族達に解脱の必要性を教えるものではないといわれますが、そうした長期に渡る葬送儀礼の負担は、生産性の低いチベットでは大変なものでしょう。私は、“死者の書”に大筋ではうなづくところがありながら、僧侶の都合のよいような“仕掛け”が作られている気がして、疑問を感じます。

私の場合も、見た、聞いたと表現するしかないもの

の、冷静に検討すればそれは、内からも外からもなくやってくるもので、今では脳にじかに触れた刺激ではないかと、さらに考えれば、最初から人間の脳の内にも刻み込まれたものが、解き放されたものではないかと思えます。それが深層心理学という“集合的無意識層”ではないかと。だとすればそれは人類に共通のもので、条件さえ合えば、誰にも体験できることではないかと思うのです。それを神秘めかして、見た、聞いたと、自分の手柄にしていけば、宗教とは少し違った超能力やあるいは巫呪の世界へいくのではないかと思えます。私の場合は、まっすぐ仏教の学びを求め、神秘体験の世界に深入りしなかったことから、何の超能力にも恵まれず、日常生活の中でアプアプしています。

この“集合的無意識層”が、人間が人間となる以前からの長い、多くの体験の集大成なら、膨大なものがあると思えます。だから一人の人の神秘体験もその人の個性、“問題意識”に応じる形で現れるものと思えます。けれどもそうした体験には、その時は知らずにしていたことでも、長い苦しい準備段階が必要だと思えますし、経験した後では、実はそのことを他へ伝えなければという責任が生じます。

釈尊も悟りを得られた後、感覚にこだわっている世

間の人に、自分の得た教法を説いても他の人々が私を理解してくれなければ、疲労と心痛があるだけだ、といてむしろ、喜びの中に浸りきろうとされましたが、梵天の熱心な請いによって、長い教化の生活に入られた、と伝えられます。もちろんそれは、後に成立した伝説で、おそらく事実は、他へ伝えなければならぬという気持ちと、このまま少しでも長く恍惚境に浸っていたという気持ちの葛藤を物語的に表現されたものでしょう。

ずいぶん前に図書館で読んだのでウロ覚えですが、真宗・大谷派の金子大栄先生が、こういう意味のことをいわれています。“自分は寺に生まれて何十年も仏教を学び、何度か今度こそ‘出会った’と思ったことがあるが、本当に出会ってみればそんなものではないとわかった。たとえ明日世界が滅びる、と知らされても、今日出会い得たこの喜びは少しも損なわれることがない”と。私もまったく同感です。明日この世界が滅びると知らされたら、誰が平気でいられるでしょう。それでもやはり永劫に流転を繰り返して、やっと求めるものに、“出会い”得た歓喜は別なのです。人類が滅びるなら次にはもつと賢い生き物が地球を受け継げばよい。そのためにも人間が地球の自然環境を道連れにして滅びるような愚かなことだけは止めなくては、と

感じたものです。

その大歓喜の中では木や花までもが、あるべくしてある存在であり、私と同じ命を分け合った仲間なので、すから、この喜びを人にわけたいと思うのは当然のことです。私の場合長年にわたる父母の争いから派生した家族の不幸の中で、人間とは何かを考え続け、“救われ難い人間”を痛感したからにほかなりません。そうした私として、当然父母からそれをしなければならなかったわけです。けれども宗教に依らなければ救われ難い人間というのは、実のところ、宗教に依っても救われないものだということを、私は父母によって痛感させられました。ようするに私には歯が立たなかったのです。あの体験によって、私自身については心配がなくなりました。それ以来、父母のために、父母に代わって仏教を学ぼうという、気持ちでやってきましたが、何にもならず父は亡くなりましたし、母も多分そうなるでしょう。その私が、まして他人様に何か言おうという元気はなくなっていました。けれど自分が責任を果たしていないという負い目はあるのです。

またそういう体験をして当然変化は起こりますし、それが社会生活を送る上で好ましいとばかりもいきりません。ある種のことには敏感になる代わり、非情というか、視点が人間中心から逸れてしまうところがあ

るように思います。善悪の観念も社会一般の道徳と少し違ってくるのではないかと思えます。私にとつての一番の悪は、自分や他人の魂を損なうこと、次に無抵抗な命を苦しめることです。たとえばカンカン照りの日差しの中で、鎖で犬を電柱に繋ぎ放しにしている人や、やっと鎖の届く範囲の狭い場所で犬を飼ったりするようなことは、一般には大した悪事ではないでしょうが、無意味に命を苦しめる許しがたい行為と思えます。それに生きてままの魚を切り刻んでピクピクしている魚を、活きがいいといって喜んで食べる“活け作り”いつぞやテレビで、身をそがれて骨だけになった魚を氷水に泳がせているところが写っていました。こんなことは美食の域をとうに越えています。人間にこんなことをする権利があるのでしょうか。“姿造り”にも私達はなれつこになっていますが、本当はかなり不気味な習慣ですね。自分のしている残酷さに鈍感（無自覚）なのでしょうが、これで日本は本当に仏教国だといえるのでしょうか。

宮沢賢治は農学校で教えていましたから、人間が自分の命を養うために、飼育動物の命を奪うことに真剣に悩んだようです。結局尊い命を与えてもらったことに感謝しつつ戴く、というところで妥協しています。肉食主義だつて、植物の命を奪うのですから、これし

かないと思います。もし彼が今の日本の、その尊い犠牲である食べ物を平気で食べ残したり、生き物の苦しむ姿を楽しむようなやり方をみたら何というでしょうか。

仏教では自分のしていることに自覚のないことを“愚痴”といい、貪欲や怒りと共に人間の悪行の基本にあるものとみなします。自覚がないから罪がない、とはしません。ともかく私は、こういう子細なことに一々悲しみ、腹を立てているので、他の善男善女のように丸くなれません。仏教学院で学んでいたころも、お寺の人から、好戦的だといわれたことがあります。僧侶が、何があっても容易に腹を立てない円満な人格を目指すようになって、日本の仏教が墮落したのではないのでしょうか。出家が本分であるはずの宗派は無論、それ以外の宗派、例えば“非僧非俗”を表明する真宗であつても、やはり僧侶を名乗る以上“俗諦（世間的な知恵、相対的な善）”よりは“真諦（絶対にして誤りのない知恵―真理）”を第一義とする姿勢が必要だと思いますが、今の日本の僧侶にその厳しさがあるでしょうか。

神秘体験を求めるとしても、同じことです。樂をして得られるものには、値打ちがないし、大きな体験に出会えば、責任が伴ってきます。それを承知の上でぜ

ひ大きな体験に出会って下さい。

(6) アンケートを見て

中山 庸子

今回の調査で、もつとも心動かされたのは、仏教徒○さんの神秘体験である。わたしがこのアンケート調査を企画したのは、彼女のメッセージを伝えることの意味を知っている高次の存在の計らいではなかったかとさえ思われる。いくつかの無意識レベルのコミュニケーションがあつて実現したのかもしれない。

現代は、こうした経験を一人の特殊なものとしてでなく、普遍的な人間存在の本質を知らずものとしてこれまでよりもさらに広範に伝え広められはじめる時代である。とわたしは認識している。「前世はお坊さん」であり、「従来は奇譚のように異端的な扱いを受けた非現実的テーマを小説世界に取り入れる。強く念じれば、現実になる。死者だつて現れる。そんな領域に・・・踏み込んでいる」吉本ばなな（朝日新聞八月十六日夕刊）が若い世代に広く読まれ、新しい世代が育つ

ているのも、自然なことである。

○さんが高次の存在に教えてもらい、自らのものとした世界観は、現在ニューエイジと呼ばれている精神世界探究の流れのなかで伝えられている内容とほとんど同じである。同様に、こうしたことを友永ヨーガ学院院長、友永淳子は「因果不変の法則。意志があるところに道は開かれる・・・見えざる助力者が現れるという宇宙の原理」と表現している。また、「神は、己のなかにあるという先人達の教え」を指摘するのは国際波動友の会会長、江本勝である。「アウトオンアリアム」のシャーリー・マックレインだけではないのである。

光から来て光に帰る、人間存在のすばらしさを高次の存在は、求める人に教えてくれる。

わたしたち人間同士は、いや植物さえも、互いに無意識レベルの深いところでつながっており、宇宙を生んだ光エネルギー、つまり神の、無私の愛そのものである神の、意志のカケラを内部にもっている。だからこそ命あるものとして、わたしたちはより真なるものより善なるものより高きものを求めて進化している。そのために、ひとりひとりとは生まれるまえ自分であらかじめ粗筋決めておいた人生の課題をこなすべく、カルマを清算すべく、目的をもって生まれている。光か

らきて光に帰る旅をしている存在である。今わたしたちはこの旅で、超特急列車に乗った・・・。

○さんの場合、彼女自身の意識の浄化によってその体験が可能となったが、わたしの場合、わたし自身は通常のまま、第三者を介在してこうしたメッセージを受けている。これを受容する土壌をつくつたのが、ヨーガや気功などを通して経験した少なからぬ神秘体験である。

今、天動説から地動説への転換にも似た、大きな意識変革、より高次なものへの魂の質的変換への準備のときにきているという。その変革への大きなエネルギーがうねりとなって地球を揺り動かしていて、それは個人、民族、国家、さまざまなレベルで起こっている。このシフトはかなりの混乱を引き起こし、逆方向へいたいへんな思いをする人もあるらしい。宇宙の気（気功の用語）＝ブラーナ（ヨーガの用語）＝光、をイメージする、つまり想像することによって肉体よりも高次元のボディに変化を与えて癒す、などということが少しづつ認識されつつある。しかしこの「非常識」は、一般にマスコミではセンサーショナルに、「×××の驚異！」扱いの段階を越えていない。この動きは当然日本だけにあるわけではなく、地球のあちこちで起こっていることだけは確かである。

一方、これまで人類がたいせつにしてきた宗教のなかで、たとえば「キリスト意識」と「仏性」、あるいは「神とともにある」と「安心（アンジン）」といった、表現は違うが、だいたい同じようなことをさしているのではないかと思われる概念をつきあわせてみる作業をすれば、新しい展開が生まれてくるのではないか。それは、調査結果でかなりの人が望む、時代に合わない経典の点検となり、もしもキリストや仏陀が現代人に話したとするとどういったらう、という仮設をつくってみるのも意義があるかもしれない。「多様な容認」という今回のわたしたちの結論ともいえる意識が求めるのは、そこから始まる「なにか」である。「あらゆる宗教は自由に存在し、自由に栄えるべきだ。神の栄光はすべての言葉で、様々な調べで歌われるのが理想である」（サイババ）

付記：九月三日、山中湖畔でわたしは五、六機の UFO が飛び交うのを見た。見たのは初めてである。

# 女と国家

——観念心による呪縛——

A 『古事記』(十五)

河野 信子

老 婆 さきほどは、『君が代』が地球形成過程に似ているとおっしゃいましたが、「石も育つ」感性は、世界のあちらこちらに、潜んでいたのかもわかりません。この年寄りも、誰が何をいおうと、すこしも「びつくり」しないぐらいの脳はもっています。ひらめかれたことを、どうぞ。それがたとえ極言であろうとも若い女 『古事記』を読んでいまして、太陽崇拜のなかに、ギリシア科学史のなかで、敗退した論理の担い手たちの、秘められた伝言が時を経て、姿をあらわしたように思えてなりません。

老 婆 紀元前二六〇年にサモスのアリストアルコスが、地球が太陽のまわりを回っているといったあのことで、アルキメデス(B.C二八七〜二一二)が書き残しています。太陽は地球より大きいと見たのですから、大きい(重力も大)ものが、ちいさいものまわりをまわるはずがない。

若い女 この時、科学者たちに笑いものにされて、アリストアルコスの説は消されてしまったわけではありません。紀元前一六〇年頃に、バビロニア人(セレウコス)が支持しています。

老 婆 なのに、プトレマイオス(アレキサンドリア)が二世紀(A.D)の中頃、『アルマゲスト』を書いて天動説を決定的にしてしまった。おまけにキリスト教がそれにのっかっていきました。年表のおさらいをしているみたいで変です。

若い女 太陽が地球のまわりを一日でひとまわりしてくるなら、太陽の速度をどのくらいと考えていたのか、すこし変です。プトレマイオスが水も漏らさぬ(と思われた)大論証で、アリストアルコスやセレウコスを見、抹殺しました。しかし、表面の舞台で、消されたものは、奈落を通って増殖すると思いたいのです。

老 婆 なるほど、「大論証のみを信ずるものは、呆れなるかな」というところですか。だが日本では天照大神がつけられた。『古事記』では、はじめから天照大神と名付けられていますね。制作年代を『日本書紀』よりあとだといった論が出ていますのも、このあたりからかもわかりません。

若い女 『日本書紀』では「一書に曰く」にはじまる「一書」の方一〇の書に、いちおう、オオヒルメノム

チといった名を出して、国生みの後に、イザナキ、イザナミ両神によつて生まれたことになっていきます。

他の書は天照大神ですが・・・どこかに太陽中心思想が隠されています。と読んでみたいのです。

老婆 アメノミナカヌシとかタカミムスヒのように、天象のなかから生まれたわけでもない。何とも、性格がはつきりしない太陽神ですな。しどろもどろの神さまのよう。

若い女 学者先生の多くは、女神ではなくて、神女（巫女）だとおっしゃいます。その後の物語が神女っぽく展開されますので。

老婆 「汝命は、高天の原を知らせ。」（『古事記』）太陽そのものの神格化とは、すこしちがいますよ。こうしておかなければ、地上の王権につなぐことができないうけでしょう。太陽のなかに住う神ではないが、さりとて、ただのヒメでもない。天の岩戸のくだりでは、太陽をも司ることができる神のようでもあり多面性のなかにありますよ。

若い女 地動説という天動説よりはましな理論が、千々に砕けて、世界中に散らばった。日本にもそのかけらが来たよ、思うてはなりませんでしょうか。

## 「現代版檜山節考

### —わが家の事情—

福島 ひとみ

前回に引き続き、病母物を書く。この際、恥を忍んで、わが家の事情を赤裸に語りたい。

母は八二年の夏に、脳腫瘍の手術をした。腫瘍の直径は八センチもあり、摘出には十六時間を要した。手術に至るまでに母は、裸足で外へ出たり、キッチンと風呂を間違えて流しの横で裸になったり、視野狭窄のためテレビの前に三十センチほど近づいて観たり、呆けの症状をかなり呈していたらしいのだが、祖父と二人だけで暮らしていた環境から、誰も気づかず、腫瘍が見つかった時は、放っておけば二ヶ月の命と宣告されるまでに手遅れの事態だった。当時私は奈良にて、母手術の報を受け、急遽帰省した。手術のあと、麻酔の覚めた母は半覚醒の状態で、「○○夫はいるか、○○子は」とうわ言のように子ども達の名前を呼び続けた。腫瘍は良性だったと診断されたものの、呆けの症状は手術前よりひどくなっていた。当然祖父と二人

だけの生活は不可能で、私は同居を決意した。当初私は父母との生活をごく軽いものに考えていた。気の合わない男と一緒に住んで自分の世界を侵犯されるより、父母との生活の方が気軽に自由な思えた。ところが、母が再起不能と判ったこの頃から、家族の内部で崩壊が始まった。私には兄弟が五人いる。上四人が男の子、下二人が女の子である。私は五番目の長女ということになる。長男は母が手術をした年に脳出血で倒れ、二年後に亡くなっているので、除外するとして、あとの四人が父を筆頭に、母に暴言を吐き始めたのである。父は、「婆さんと一緒にいたら、俺が呆けてしまう、施設でも病院でも入れてしまえ」と容赦なく言い放ち、次男は、「親が子より先に死ぬのは当たり前」と母の余命を無視するまでに軽んじた。三男は、「ああいう性格だから病気になった」と身も蓋もないことを言い、四男は、十六時間の手術をして半年も経たない母を、寝間着姿のまま起こして来て、「悪者はいつもあんたやった」と説教をし始めた。呆けた母は、わけが分からないながら、怒られていることだけは分かって、啜り泣いていた。偶然その言葉を漏れ聞いた私は、四男の後頭部を、山岸涼子の漫画ではないが、斧で打ち割ってくれたらどんなに胸がスカツとするだろうかと思案に考えたものだ。これが「男」のすることかと、ま

ったく情けなくなつた。妹は、「私は外に出た身(嫁いだの意)だから、母のことは一切知らない」と毒づいた。こうして母は、石が坂を転がり落ちるようになる。最悪の環境のなかで、呆けの症状を重くしていったのである。家族による、形に現れない殺人でなくして、何であつたらう。これが、五十余年に渡つて明治男を支え、八十過ぎまで生きた姑を抱えて、九人家族の中で、六人の子どもを産んで育てた女の一生の総括である。直情な表現になるが、こういうことが許されてはならないと思つた。この女を見捨てることが、どうして私に出来たらう。この女を見捨てることは、私が私自身を見捨てることであつた。

確かに母は、気の強い人であつた(おまけに、新聞も読まないような、文字言語文化に縁遠い人であつた)。けれど、フェミニストとしての私の記憶には、「女としての」自己の喜びは何一つ知らず、ただ奴隷のように六人の子どもを産んで育てることに生涯を費やした愚直な女の姿が浮かび上がるだけである。もし私が、死か、母が歩んだ一生を選ぶかと問われたなら、ためらわず、「嫌だ、殺してくれ」と即座に答えただろう。それほど、私から見た母の一生は、夢のない、絶望的な、やるせない人生であつた。この女を護れずして、私はフェミニズムの何を語ることが出来ただろうか。

こうして私は体を張って、イエから追い出されようとする母を護らなければならなかったのである。

「どこへでも入れてしまえ」と一喝する父を、私は突き飛ばし、蹴り、殴った。「親にこんなことをして」と詰る父に「うるさい！呆けたおつ母さんを捨てようとするおまえなんか、親じゃない。鬼だ。死ね！」と怒鳴り返す私。父は私の髪を引きずり、小突きまわした。八十を過ぎてても男だから力があつて、非力な私とは互角の“名勝負”であつた。母の介護をめぐって、こういう掴み合いの喧嘩を私は何度父としたことか。この頃の私は、母不憫さのあまり、父に対して殺意を感じなかつたと言えば、嘘になる。休日というものがない介護の辛さに、母との心中を考える一方で、夜、父が寝ている部屋のドアを開け、その首をほんのひとひねりさえすれば、この妖怪のような家父長の重い重い桎梏から逃れることが出来るんだなあと呻いては、両手で頭を抱えて蹲った。そういう生活が、ちようど十年続いた。そして九十二年の春、父が八十七歳を過ぎたある夜、彼は脳梗塞を起こし、救急車で入院した。家へ引き取れる状態ではないと病院から告げられた時（朝の五時から夜の十一時までおむつの世話に追われる母と、父を同時に抱えることは、物理的に不可能だったわけだが）、私は二晩泣き明かした。爺い、ごめ

んね、ごめんね、と胸の底からほとばしる悔悟の叫びは、父に暴力をふるったことそのものよりも、この夫婦にこういう形でしか生の終末を迎えさせることができなかつた、自身の無力さに対する無念さからであつた。ベッドから落ちるという理由で、マットレスだけで病室の床にじかに寝かされた惨めな姿の父を抱いて添い寝しながら、私は声もなく泣いた。たとえようもなく無防備で無力になつてしまつた父を見ては、過去の確執はあとかたもなく消え、ただ肉親の不合理な情が募るのみだつた。そして私は、それが人間なのではないかと思う。いかに不倶戴天の敵であつても、相手が再起不能なまでに打ちのめされれば、攻撃する気は起きないというのが、人の条理ではないのか。その点で、呆けた母をこれでもかと傷めつけた父や兄弟の気持ちだが、私にはどうしても分らない。

そして父はMRSAに感染し、全身を菌に侵されて、ミイラのように痩せ細り、多臓器不全で半年後に亡くなつた。その頃はすでに母も他の病院に入院していたわけだが、ほどなくして母もMRSAに感染していることが明らかになり、また私の新たな苦闘が始まるのである。それは快癒したので、その辺の経緯ははぶくことにする。

ここで私は、母がたどつた、二十世紀末の現代まで

連綿と続く、「女三界に家無し」の定めについて考察したい。

家族の冷遇に絶えながら、母の介護に携わった十余年、「なぜ子ども達は『母殺し』に走るのか」という疑問が脳裏をよぎらなかつた日は、一日とてない。わが家の場合、問題は父にあつたというよりも、父に象徴される妖怪のごとき家父長制を支えた他の兄妹達にあつたと思われるからである。その疑問の鍵を解く文章に、田嶋陽子著「もう女はやってられない」の中で出会つた。

田嶋氏は、ギリシャ悲劇の、ギリシャ軍の総帥アガメムノンがトロイア侵略を遂行するために、娘イフゲニアを生贄にしたストーリーを引用する。怒つた母親クリュタイムネストラは、トロイアから凱旋した夫アガメムノンを愛人アイギュストロスと共に殺す。娘エレクトラと息子オレステスは、母を（夫殺し）の罪で刺殺する。母クリュタイムネストラは亡霊となつて、復讐の女神達が原告となり、アポロンの神を証人とした裁判が行われる。オレステスに母殺しを命じたアポロンの神は言う。

「母というのは、その母の子と呼ばれる者の生みの親ではない。その胎内に新しく宿つた種を育てる者に過ぎないのだ。子を儲けるのは父親であり、母はただ

主が客をもてなすように、その若い芽を護り育ててゆくだけなのだ。」

市民の裁判官による投票は、半々となる。そこに、「母の胎内から生まれなかつたことを誇りとする」アテナの女神が、オレステスに一票を投じ、彼は無罪放免となる。

「この投票をオレステスに加えましょう。私はよろずにつけ男性の味方をします。心からね。私はすっかり父親側ですから。家のつかさである夫を殺した、女の死にざまの方が大事だなどは思いますまい。」

母体の間に身の養いを受けたことはない、と母を否定し拒絶するアテナの女神の一票によつて、インチキ裁判は完了し、これでもかと父権制勝利を印象づける戦後処理は終わる。母クリュタイムネストラの、父権制下での女の生命軽視と一方的な性的抑圧に抗議した公平と正義を求める言葉は無視され、母の怒りや抗議に耳を傾ける者は、一人もない。母より父を大切に、自分を守るためには母の視点を捨て、父の視点を内面化しなくてはならない。

母の言葉、すなわち母の正義と公正を求める抗議の言葉を抑圧することは、女の生命が男のそれより軽いことを認め、性的抑圧を甘受することであり、女の役目は男の子どもを産み、男の慰め役であることを認め

ることである。原母クリユタイムネストラが娘の殺害に抗議して夫を殺した論理と理知と勇氣と情念と決断力は、完全に抑圧される。それらの人間的資質を女が持つことは、男にとって不都合だからである。

まして「胎児客人説」となれば、母は「産みの親」ではなく、ただ父の子を「客をもてなすように」護り育てるだけであり、母の法的、社会的立場は決定的に低くなる。父権制化で女が母になるということは、いつなるときその「客人」すなわち自分の産んだ子どもが、父の名のもとに自分を殺すかもしれないという危険を生きることである。

この「胎児客人説」を読んだ時、私は母のことを思い、改めて泣いた。涙が止まらなかつた。父権制化での母というのは、何と自己撞着した存在なのだろうか。まさに私の母にとつての子産みこそ、主の腹を立ち割って出現し、主の生命を滅ぼしてしまふ、エイリアンに襲われたようなものであった。

父権制化においては、人々は弱者の視点に対し、去勢されているという田嶋氏の説に、共感せずにはいられない。自己保身をはかる(と自分で思い込んでいる)ために、女も男も、女との連帯を拒み、母に象徴される弱者の意義申し立てを踏みつけ、多数の正義の名のもとに、さまざま矛盾や偽善をはらんだ平和という

に値しない「平和」な、一大家父長制世界を管々と築いているのが、現代社会ではないのか。私が自分の身内も含めて、この去勢された卑小な男女を「インポと売女」と悪しざまに罵るのも、「人間」に対する裏切り者という意を表している。噴飯ものの平和であり、社会である。

ともあれ、私が呪詛した、天皇、爺い、鄧小平という、妖怪のごとき家父長の二人までもが滅んだ。あとは鄧小平一人が残るのみである。私は、鄧小平の長寿を保っているのは、彼の体力ではなく、去勢された中国民衆の妄執であると思わずにはいられない。話は少々飛躍するが、売共奴鄧小平が死した暁には、中国、ロシア、そして世界はまた新たな動きを見せるだろう。その点で、私はコミュニズムの未来に決して希望を捨てていない。こうして私達女の闘いも、歴史の大きなうねりの中で、前進や後退を繰り返しながら、少しずつ進歩をとげて行くのだろう。その中で大切なのはやはり、「今自分にできること」をすることではないのか。私自身について言えば、何とか母を護り通すことができた(つまりフェミニストとしての私を護ることができた。)というより、護らせてくれた神に感謝するのみである。過酷な状況で介護に携わったこの日々は、出口の見えない長い暗いトンネルを歩いているよ

うなものであった。あとで気づくのは、どのような時でも神は肝心なところでお護り下さったのだということである。

最後に、ナチに抵抗して闘った、行動の殉教者、D・ボンヘッフアーが処刑前に獄中で書いた詩を引用して、父母への鎮魂歌（母はまだ存命だが、いずれ遠くない日に見送ることになるだろうから）としたい。

良き力にすばらしく守られて、

何が来ようとも、

われわれは心安らかにそれを待とう

神は、

夜も朝もわれわれのかたわらに、

そしてこの新しい日も

必ず共にいまし給う。

## 書評と紹介

*Transforming Grace: Christian Tradition and*

*Women's Experience*, by Anne E. Carr, Harper:

San Francisco, 1988.

川橋 範子

ヨーロッパ文化史のとある女性研究者が、「いずれの文化においても宗教は家父長的でありフェミニズムとは相容れないというのが通説である。」と述べたことがある。そのとき私は彼女に対し、フェミニスト神学という概念を知らないのだろうか、と驚いた記憶がある。

この本の著者、アン・カーはシカゴ大学宗教学部の教授である。日本ではあまり知られていない学者かもしれない、カー教授はカトリックの背景をもつフェミニスト神学者である。教授は冒頭でフェミニズムとキリスト教は共存の可能性を有するのみならず、実はこの二つは分かち難く結び付いていると述べている。

彼女は大学で教鞭をとる間に、信仰の内側に立つ者こそがフェミニスト神学の観点からキリスト教の主要なシンボルを内省的に批判検討する義務を負うのだと

思うようになったと言う。故に彼女はフェミニズムがキリスト教に投げかけたラディカルな批判を率直に受け止めている。しかしながら彼女は、教会を去ることなく、キリスト教の内にとどまって、未来の教会のためにキリスト教を変容させてゆこうとしている。そして、その手助けとなるようなフェミニスト神学を目指しているのである。「教会の中に踏みとどまり、教会を変革する決意を持つ者は教会を去る者よりずっと革命的でラディカルなかもしれない。」(p18)と、書いているが私は個人的にこの考えに非常に共感を覚えてる。

カー教授はカトリックのフェミニストたちが辿ってきた道程を省みる。それは女性司祭登用問題に始まり、さらにより広い意味での女性と教会に関する問題へと移行し、再び女性として、そしてクリスチャンフェミニストとしてどのような宗教的実践が可能かという問題へと戻ってくる。(p2) この道程において彼女は一貫してイエスが彼の時代に存在していた家父長制から驚くほど自由な人間であり、女性を抑圧する当時の社会制度に批判的であったと説いている。したがって彼女にとってフェミニズムからの既成のキリスト教への批判は恩寵なのである。「重要な神学上の言語を、特に父なる神という言葉を、文字通りに解釈し、神と

いう実在を男性の規範に還元してしまうことに対するフェミニズムからの批判は、神学にとってそして現代の教会にとって偉大なる恩寵である。フェミニズムは、キリスト教の思想や行動の中にいつのまにか忍び込んできた(男性中心の)偶像崇拜をゆるがし、女性とそして教会全体のために我々すべてを包容する、真の超越者としての新しい神のイメージを提供してくれる。」(p134)

フェミニスト神学の手法は、彼女によると「ダブル・クリティーク(二重構造批判)」と定義されている。この手法は一方で、女性に対して抑圧的な社会、政治、文化、宗教状況を正統化してきたキリスト教の教義を批判する。他方ではフェミニストの解釈による福音とキリスト教のシンボルを以て既存の性差別主義的な文化制度を批判し改革する。この背景には勿論、宗教的シンボルが見かけよりずっと強力な存在であることと、人々の価値観を規定する役割を果たすことが前提となる。(p103)

フェミニズムに様々な派閥があったとしても、地球上の殆どの場所で女性は服従させられているという認識と、学問の世界にも男性中心主義が顕著であるという自覚と、さらにこのような誤った不公平を正してゆこうとする関心は共通の概念であると教授は述べる。

また、彼女は「フェミニスト・スピリチュアリティ」を単なる「女性のスピリチュアリティ」から區別する。女性のスピリチュアリティは単に男性と比較して女性に特有とされる神との関わり方をいう。一方、フェミニストスピリチュアリティとは女性が歴史的に負ってきた様々な拘束に対して批判的であり、女性の自己実現、自己超越をはらむ全ての文化、宗教的イデオロギーに反対する精神性である。これはまた女性も男性も共有できるものだと言明している。(p207)しかし彼女はこのようなフェミニスト神学者の意識が新たなイデオロギーとなることへの警告も忘れてはいない。

フェミニストスピリチュアリティという言葉が示すとおり、フェミニズムの中で宗教が市民権を得ている欧米の状況が羨ましくもある。最終的に宗教は抑圧的な側面のみでなく女性を解放する可能性も内包しており、必ずしもフェミニズムと宗教が二律背反することはない。これを宗教に無関心であり批判的な日本の女性学研究者に理解してもらうには私たち自身が宗教シンボルの再構築に取り組み、フェミニストスピリチュアリティを志す者のコミュニティを作って行かなくてはならないということだろうか。

いづれにしてもこの本はローズマリー・リユーサー

の言葉通り、フェミニスト神学者が待ち望んでいた本であるといえる。

## 天理教の実体には失望

加古美幸

『性差別する仏教』の中で、天理教の中山みきと大本の出口なおについて、書かれておられましたものを読んで、実際の教義の中の教祖像は、どんなものかと思ひ、近くの天理教会へ出かけて行き、話をきいてまいりました。

私がたずねましたのは、名古屋の愛町分教会傘下の布教所だったので、その教会長の奥さんという方が、話をして下さいましたが、やたらと女の道とは夫につきし親を大事にする事だ、とか、夫がよろこぶことなら何でも進んで下さい、等々に始まり昼は家政婦のごとく、夜は娼婦のごとくおつとめを進んで(セックスの事です)が)しなさい、云々・・・というものでした。

まるで、男権主義とも言うべき古くささを感じてしまいい何等ら新しく進歩的な女性像は感じられませんでした。天理教とはひと口に言っても、各々布教所（及びその傘下教会）によって教えも、教義とする教典も違うそうです。『女でも、理さえ治まりてあればどんな事も出けるでへ。この道男だけで、女は世界へ出さぬのか』という言葉がありますが（女松男松のへだてなし）「この分教会の教義書」おやさまのおことば」（その四おやさま七六歳）によると「男女のへだてが無いというても男は男、女は女やで、男が女のようになり、女が男のようになってしまつたら道が無うなつてしまふ男は天、女は地、女は地やから天を立てて通らしてもらふのやで、女が天に手を届かそうとするから怪我をするのやで、妻は夫に逆らわぬよう何でもはいはいというて夫に従い、云々」となつてしまふらしいのです。事実女の（妻の）道は、この様につかえることにあると、中山みきは教えられたと、こんこんと説明し言われました。これは一体どういう事でしょうか？

教会長夫人のおっしゃる事の中には、女性が世の中へ出て、男まさりに・・・という表現をする事が多いし、そんなことよりも、たくさんセックスをして、子供を生み夫と親につかえさせなければ幸せになれる。

と説かれる事が多いのです。

中山みきの性（男女結合）はそういう意味だったのでしょうか？おまけに、処女で結婚しなければ女の価値が下がるتماで言われました。”女の性器Ⅱまたぐら（蔵Ⅱ宝物をおさめる場所）”男の性器Ⅱ宝物（珍宝）という意味だからだそうです。なんともこつけない話ですが、じゃあ男には純潔は、問わないのか、何をしても女に許されるのか、その尻拭いをなんで女ばかりが昔からさせられてきたのか、と聞きたくありません。

それではレイプされた女は、性的いやがらせを受けた女は、価値が下がるのでしょうか？

男が女を性的玩具の様にあつかうから、はては人種差別にまで発展し戦争にまでいたるのです。おまけに、核などというとんでもないオモチャで世界を滅ぼそうとしている。女が、男のようなことをしたら世の中おかしくなつてしまふという事ですが、私はそうは思えないのです。

人には持つて生まれた能力というものが個々にあるのだし、男でも女でも有能な人は社会で働き、いや、私は家事、育児の方が好きだ、という人はそうすれればいいのです。それじゃあ男女役割として、なりたつてゆかない、と言われますが一体、何のための役割な

のでしょうか。子供を生もうが生むまいが何人生もうが、それは女の自由なんです。集団が組織がそれを束縛し、管理するという事は国家統制にもつながり得る、と思えてなりません。話が大幅にずれてきましたが、私は最近ちよつと悩み事があつたもので宗教の本などを読んでいたのですが、それともうひとつ自由で女性ものびのびと自信を持つて生きられるそんな教義なら一度聞いてみようと思ひ出かけて行つたのですがそれとは違ふ事を聞かされて残念でした。

## フェミニズムという名の不幸と宗教心理

平野 茂男

フェミニズムとは何かについての議論が混迷しているようである。フェミニズムという名の不幸について考えてみたい。フェミニズムという名の不幸から出発してどこに行くのか。

フェミニズムとは女性者である個人の解放のための方法論である。労働者である個人の解放のための方法論がマルクス主義である。特定の属性を捨象した個人一般の解放のための方法論が宗教と個人主義の論理である。ここに宗教と個人主義の論理が正統の思想として認知される根拠がある。特定の属性をもつ個人の思想は異端として排除される根拠がある。

解放されるべき人間の実体とは何か。ヘーゲルによれば欲望の主体でありショーペンハウアーによれば盲目的な意志と表象の主体である。仏教によれば「空」であり「無」である。空とは人間の本質であるか。キリスト教によれば人間の優れた属性は神のものであるとされたので人間の貧しい属性だけが人間に残されたとホイエルバッハは指摘した。人間はこの疎外した関係を逆転する必要があるとする。これは正しい指摘であるか。実体は何か。人間賛美を否定した宗教の論理はまちがいであるか。個人賛美は同時に集団（民族）の賛美が補完することになる。マルクスの人間実体は階級闘争の主体である。この主体はいつ階級闘争をやめるのか。フェミニズムの人間実体は性差別の主体である。この主体はいつ性差別をやめるのか。ヘーゲルの欲望の主体はいつ欲望の主体をやめるのか。盲目的な意志と表象の主体であるものはいつその主体であるこ

とをやめるのか。

人間は自己を否定して他者と同一化する。これにより自己と他者との全体を生きるための方法を得ることになる。人間の実体は「空」であり「無」であり無価値性であるがこれによつて逆転することができるか。

宗教とは人間に対する絶望の表現形態である。人間に対する絶望を認識する人間が出現する。ニーチェはその例となるか。彼は宗教を否定した宗教者である。この矛盾を理解したならば彼は救われたであろうか。実存主義が宗教に近いとみられるのもここに根拠がある。

宗教とは人間に対する絶望の表現形態である。人間には良いところがあると少しでも認識する場合にはその主体は宗教者となりえない。神（仏）になりきれないということになる。そんなことならば宗教者となりたくないという結論も出てくる。芥川龍之介の「とししゆん」という話もある。人間に対する絶望を認識したものは幸せである。宗教者となることができるからである。宗教者となることは実体的には人間の立場を離れて神（仏）の立場に立つことである。そこで神（仏）になりきることである。神（仏）の立場は人間に対する絶望を認識しているのではないか。そうであるとすると人間に対する絶望を認識したものとしての自己の立場と同じではないかと気づくのが宗教である。自己

の立場と神（仏）の立場との同一性を認識するのが宗教である。自己の立場と神（仏）の立場との同一を認識することは両者の完全な相互理解の成立を示すものである。神（仏）とは実体的には相互理解の対象である。人間の危機（絶望）は両者の完全な相互理解によつて解決形態を発見することができるのだ。ところで神（仏）とは何か。正確には両者は同一性である。

人間とはバカらしい存在であると認識することは何を意味するのか。人間に対する絶望とは何を意味するのか。それは神（仏）の立場に移動することを意味しているのだ。人間は自己を否定したときには神（仏）の立場に移動することを意味しているのだ。神（仏）になりきるためには人間に対する絶望が必要なのである。人間も良いものだ神（仏）も良いものだ両立させることはできないのである。両立させることができればハッピーとなりえるか。そんなに簡単にはいかなない。人間を否定して神（仏）の立場に移動することは人間を否定した限度では完全に人間を理解したことになる。理解することを完了した実体が神（仏）であるといわれるものとなる。理解することを完了したときに全知識全能となる。神（仏）とは全知識全能であるとされる根拠がここにある。自己は人間一般（総体）から解放される必要があるのだ。その手段方法が宗教

である。これは解決形態の一場合である。ここから見えてくるものは何か。

人間に対する絶望を提起していくことができる。ウーマン・リブの問題提起とつながっていくことになる。大越愛子氏の論文「フェミニズムは分離主義を超えられるか」を読みかえした。

フェミニズムの出发点はウーマン・リブにある。大越氏の整理によると「ウーマン・リブから女性学へ」そしてマルクス主義フェミニズムに至るとする。マルクス主義は労働者階級の解放理論でありフェミニズムは女性者階級の解放理論である。両者の結合は女性者が労働者であるとの限定的範囲においてである。そこを越えた場合は別個の問題となる。「文化パラダイム解体分析派の試み」はこの越えた場合に該当する。

「性別役割分業解体戦略」もこの越えた場合に該当する。「性別役割分業」を労働の問題として解決したのが上野式マル・フェミである。そこに欠落しているものは何か。それはフェミニズム政治運動である。

フェミニズムとウーマン・リブとの相違は何か。ウーマン・リブの本質はフェミニズム政治運動である。フェミニズム政治運動とは何かを探求すればそれが答えとなる。上野氏の理論はフェミニズム経済学・心理学・社会学でありえるがフェミニズム政治学ではない

ということが原因となる。フェミニズム政治学はマルクス主義政治学と同じ運命となるか否か。政治学を意識的に認識して論争する必要がある。フェミニズム国家論が存在しないところで議論することは困難である。

上野式マル・フェミは「性別役割分業解体論」である。その続きは「女と男を束縛してきた文化規範の意味解体化、遊戯化である」と指摘される。これに対して大越氏の立場は「文化パラダイム解体分析派」であるとする。そして「この国を相対化する視点を持たない限り現実を突破する道は開けない」とする。

「相対化する視点」はどのように獲得するのか。フェミニズム政治運動団体は存在するのか否か。それはマルクス主義政治運動団体その他の政治運動団体の内部の一部として存在しているのか否か。

文化パラダイムとしての宗教の批判は宗教における性差別を批判していくことになる。この宗教を相対化する視点を持たない限り現実を突破する道は開けないことは明白である。ここが重大問題なのである。大越氏は「何故か常にその転回の果てに日本化という悪夢に落ち込んだ」と指摘する。この危難を避けるためには徹底的な宗教論争をする必要がある。既成宗教を肯定したうえでの論議には限界がある。

上野式マル・フェミの「性別役割分業解体論」。氏

はマルクス主義とフロイト学説でフェミニズムを擁護しようとする。マルクス主義によれば労働者である女性の解放の論理は構成できる。しかし労働者である女性者だけであると女性者を限定することは不可である。

性別役割分業としてどこまでの範囲を規定するのか。狭く規定すれば出産だけが性別役割分業である。それ以外は性別役割分業とならない。不合理な女性の労働を広く性別役割分業と規定することは誤りである。ただ性別役割分業と認識されていると社会通念を指摘することはできる。出産という性別役割分業を解体したらどうなるのか。性別役割分業ではなくして女性労働論として規定すべきものである。家族労働論として規定すべきものである。女性労働をすべて性別役割分業であると規定することは不可である。

上野式マル・フェミは「身もふたもない家族分析の後に破壊的な家族解体論を唱えて世間を齷かすのではなく現実的実践的戦略として性別役割分業解体という具体的処方箋をあたえた」とする。上野式マル・フェミの限界と欠陥はこの点にある。破壊的な家族解体論を唱えて世間を齷かすことができなかつた点にある。この限界と欠陥とに自覚的になれない限りではフェミニズムの前進はない。他方では「天皇制の是非という

政治的文脈に巻き込まれること」を避けた女性学フェミニズムの限界と欠陥とが自覚的に反省されるべきである。そこにあるのはフェミニズム政治(学)の不在である。家父長制の発生場所は家族である。その家族を解体批判しないでは家父長制を解体批判できない。性別役割分業解体とは家族の場所だけの問題か他の場所の問題をも含むか否か。家族解体とは家族不存在ではなく家族が人為的結合であることの解明である。

今年には国際家族年である。多元的国家論によれば家族は一の国家なのである。家族の政治的側面を觀察すると家族は一の国家なのである。経済的搾取の事実を指摘するだけでは不十分であるので政治的側面を觀察する必要がある。家族についての政治学・国家論が必要である。天皇制度が参考となる。

「個人的なものは政治的である」か否か。この点の確定整理も必要である。「女と男の関係変革」といつてもその関係とは何か。経済的關係か政治的關係か。感情の關係か。文化パラダイムの内部での男女關係であるのか。主体としての個人から見えてくるものを確定していく必要がある。個人は女性であるのか労働者であるのか。相手方は何なのか。安心するためその他には宗教が必要か否か。

「女性原理もしくは母性原理という性差拡大の形而

上学主義こそ女性抑圧の元凶である」か否か。「母性原理こそが最大の抑圧原理となる日本の文化パラダイムにおいて」このように結論する。「性差拡大主義の女性原理派フェミニズムは女性抑圧的である」か否か。「女性原理もしくは母性原理」を抑圧原理として利用（使用）してきただけの問題ではないか。利用の仕方が批判されるけれども「女性原理もしくは母性原理」そのものに欠陥があるわけではない。「女性原理もしくは母性原理」をどのように扱うべきか。不正利用して抑圧原理として利用してはならないという問題である。坊主（性差）がにくいと袈裟（女性原理もしくは母性原理）まで捨てることになるのか否か。性差そのものに欠陥があるわけではない。性差を不正利用して抑圧原理として利用してはならないという問題であると認識すべきである。性差拡大は必然の動きであるがこれを不正利用して抑圧原理として利用してはならないという問題である。

「女性原理もしくは母性原理」は愛情の関係である。この関係を経済の関係として観察すると不合理が発見される。愛情の多少は経済的対価の多少とは対応しない。愛情の関係を優先させるのか経済の関係を優先させるのか。ここが理解できなくて人生は狂ってしまうのである。

混迷を抜け出るための方法論を堅持する必要がある。宗教はその方法論となるか否か。

第一の前提として人間（自己）は不幸であるということである。そこからの救済、脱出のための方法論が必要となる。フェミニズムとかマルクス主義とか宗教はそのための方法論となる。不幸であると認識しない人間にはこれらは必要としない。不幸であることをやめるとこれらは必要としない。宗教の極致は宗教の否定である。マルクス主義の極致は理想郷である。フェミニズムの極致はどうなるのか。推定はできる。

第二の前提として人間（自己）は不幸から救済・脱出できるということである。そのための方法が提出されているということである。

第三の前提として人間（自己）はこの第一と第二とを循環しているということである。正確には両者は同一性である。時間が介入する問題について時間を捨象してしまうのが宗教的解決形態である。仏教では輪廻を説く。輪廻から時間を捨象したものが釈尊の悟りの内容である。時間を捨象したものが「同一性」である。

空間についても同じことが言える。時間と空間を捨象したものが「同一性」「無」「空」といわれるものである。キリスト教ではここを次のように言う。はじめに言葉ありき。言葉は神（真理）であった。

フェミニズムという言葉ありき。言葉は神（真理）であつた。

注 釈 尊 其 他 の 名 前 は 他 の 者 で も よ い 。 内 容 に 重 点 を お く か ら によ る 。

編 集 後 記

今号の編集は中山庸子さんです。春以来、仕事や引越し、母の入院など個人的な事情で忙しく、WOMAN SPIRITの編集を代わって下さる方を探していたところ、中山さんが快く引き受けて下さいました。前からあたためていた構想で、中山さんがアンケートの質問作成から発送、分析、コメントの依頼まで全面的に実施され、ご覧のような「宗教意識調査」となりました。中山さんのご労力に感謝します。フェミニズム・宗教・平和の会としてはじめての調査でもあり、いろいろな不備な点もあると思いますが、この結果を読んで会員の皆様がどんな感想を持たれたか、声を聞かせてくださることを願っています。

来年は敗戦50周年です。戦争責任の問題は今も私たちの頭上に重くのしかかっています。国家神道だけでなく、仏教もキリスト教も国家体制に加担したこと

を考えれば、宗教と戦争責任の問題は非常に大きいと思うのですが、宗教者の中からあまりそのような声が聞こえてこないのはなぜでしょうか。  
私の転居にともない、会の住所・電話番号が変わりましたのでご注意ください。また、振込口座の番号も新しくなりました（新しい番号は00170-9-8021です）。

（奥田 暁子）

バックナンバー

Womanspirit (No.11以降)

No.11	特集「新しい宗教性を探る」	500円
No.12		500円
No.14	特集「続・身近な家父長制」	600円
No.15	特集「けがれ」	600円
No.16	特集「続・けがれ」	600円
No.17		600円

フェミニズム・宗教・平和

3号	日本女性の精神の源流	500円
4号	宗教の女性政策	500円
5号	フェミニズムからみた 東アジアの経済発展と宗教	500円
6号	転換期の女性	600円

Womanspirit No. 18

一九九四年十月発行

発行 フェミニニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180 武蔵野市関前五―五―二五  
奥田方

〒527-5501 〇四二二(五三)八七四六

郵便振替 〇〇一七〇―九一八〇三一

定価 六〇〇円

印刷 伊野印刷所